



* 0 0 5 7 6 3 8 0 0 0 *

0057638-000

特 2 6 5 - 1 8 9

海軍実用書翰文

片山米造・著

級進社

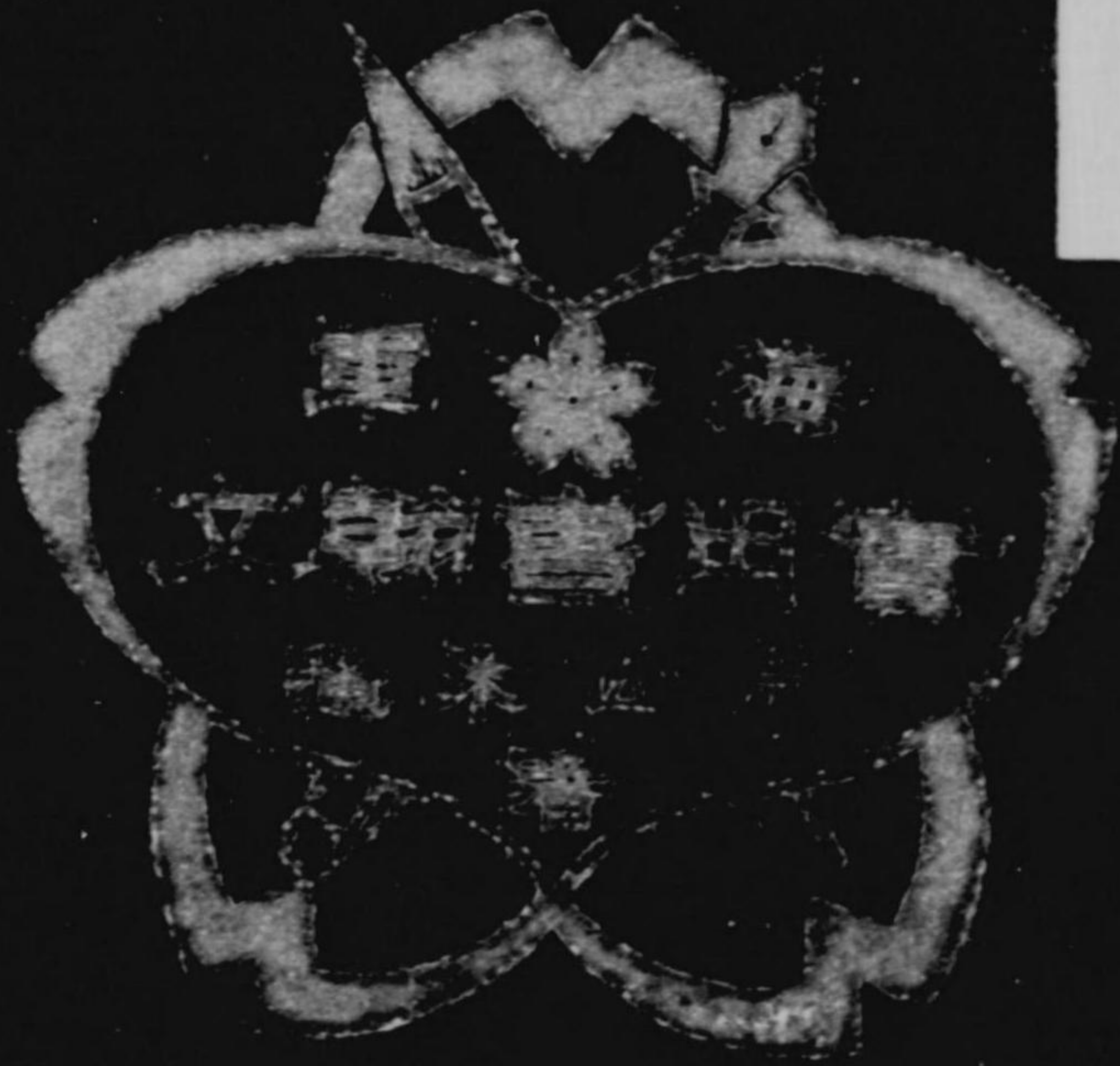
昭和 1 0

AJG

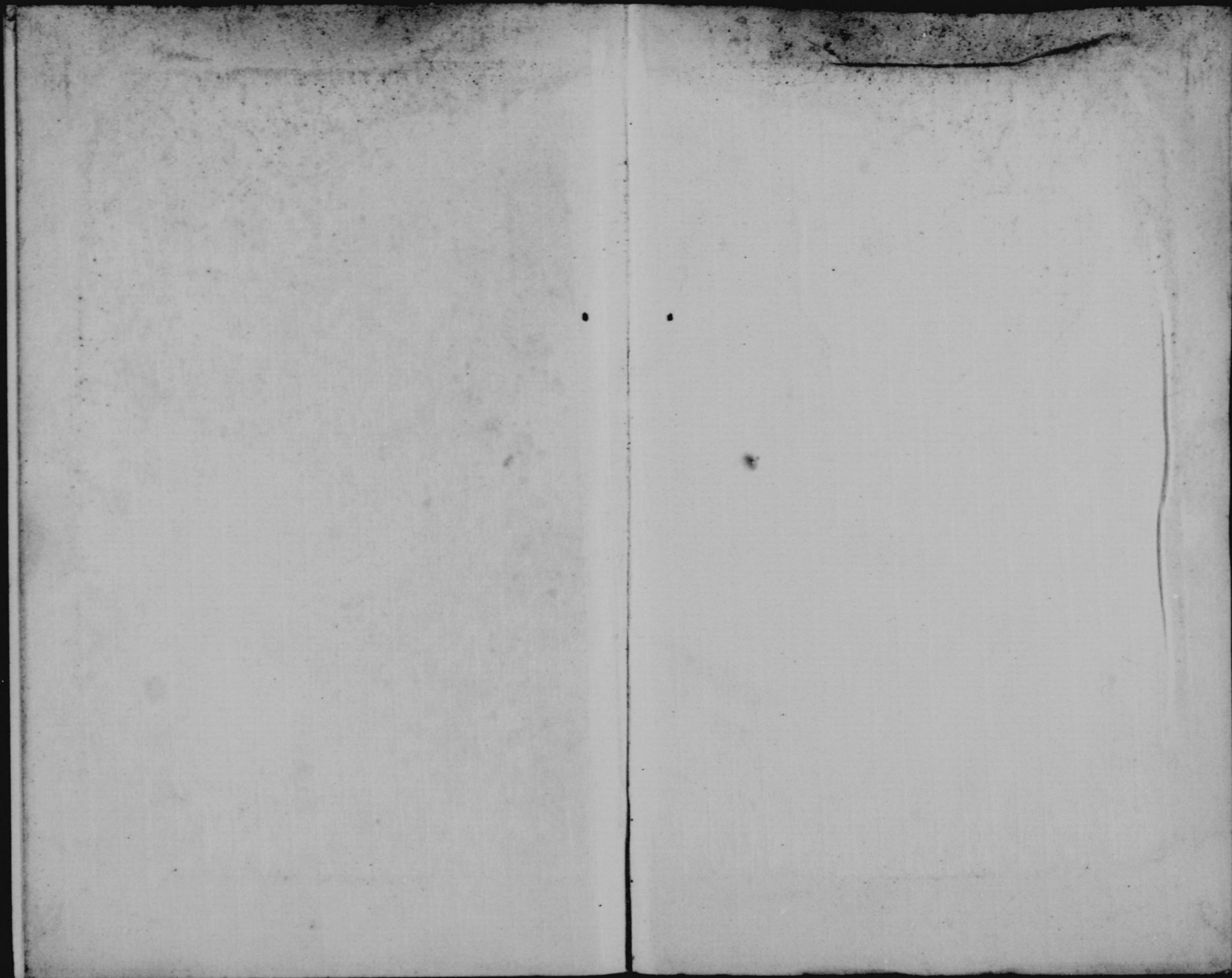
この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第 6 7 条の規定に基づき、平成 1 2 年 3 月 2
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

357

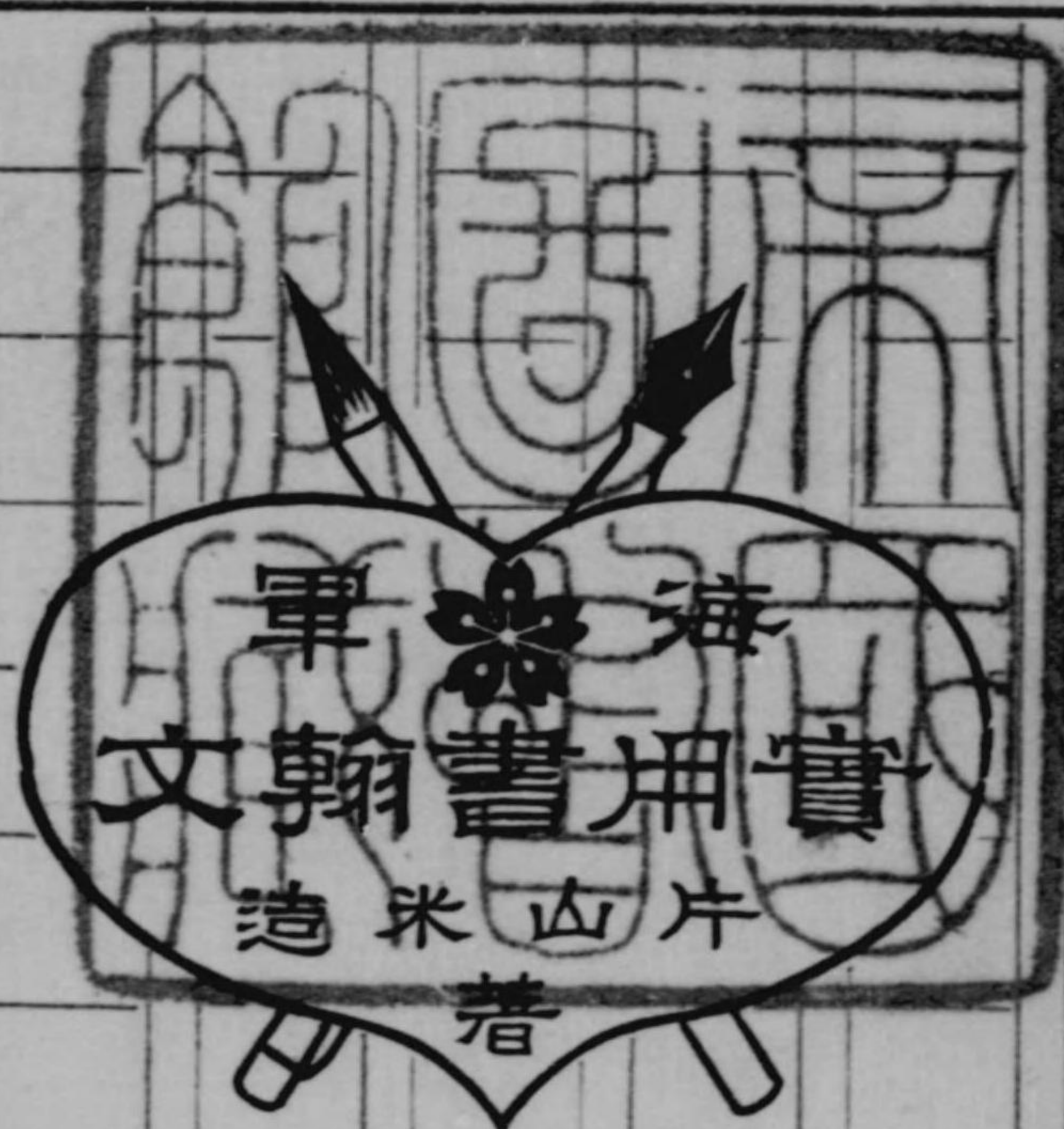
491



特

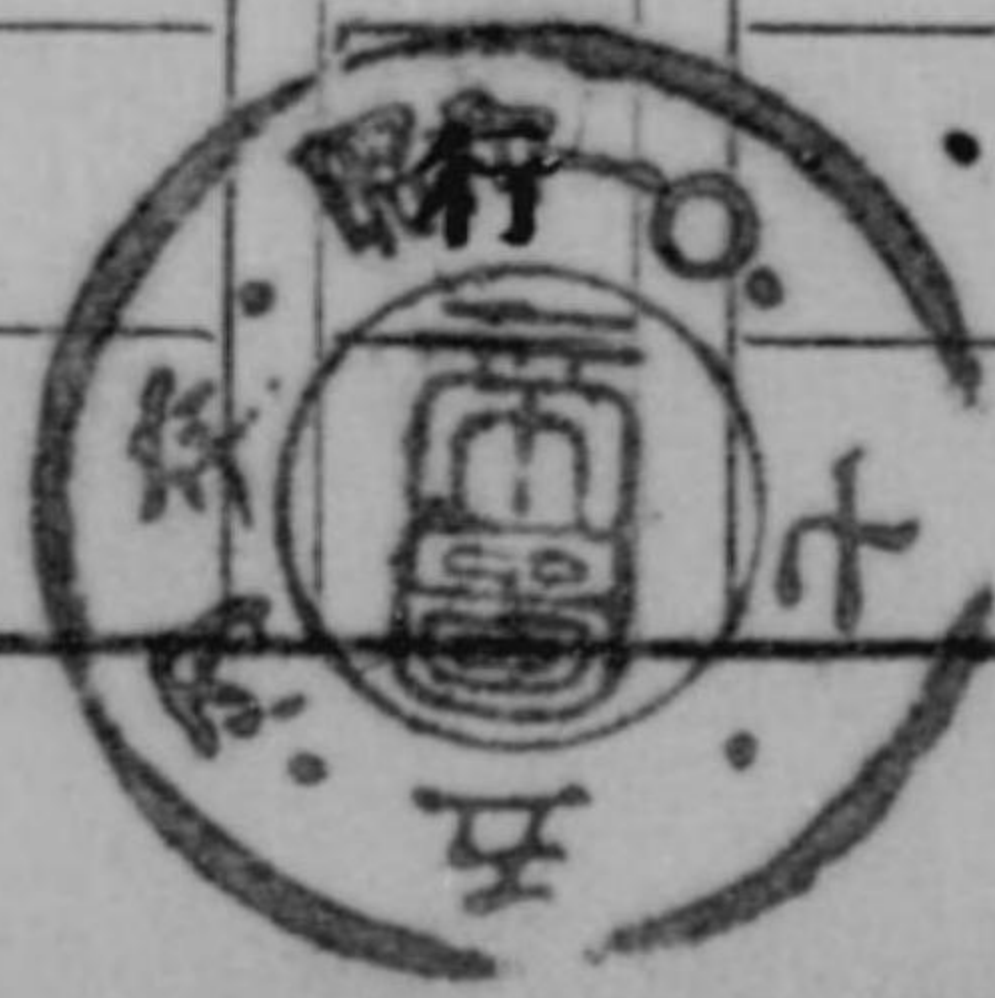


特265
189



！

級
進
社
發





著者の聲

一、本書は海軍々人就中下士官兵諸士が實際に用ひらるる書翰文のみを書いて集めたものであります。人に數百千と數限り無い用件があると同様、手紙にも數限り無い用件があります。けれども海軍下士官兵としては突飛びな用件の生じ無い限り、先づ本書に收むる書翰文位を知つて居れば日

常の用は達せられると思ひます。即ち實用向の書翰文を主に書いたもの
です。之「海軍實用書翰文」と題して諸士に提供する所以です。

二、本書に收むる書翰文は、著者が多年の海軍生活に於て得たる体験を基礎
として書いたものでありますから所謂名文とか能文とかには、およそ縁
の遠いものがあるかも知れませんが、實際に應用し利用してみると案外
間に合ふであらうと思ひます、のみならず。本書程海軍下士官兵諸士の
心持即ち書かうと欲するところを如實に書き表したものは他に有るまい
と信じてゐます。

云ふまでもなく海軍には海軍獨得の気分があり、用語があります。だか
ら書翰文も一般社會人とは一種異つたものを書く場合があります。著者

は之等の事情をよく心得て書いたつもりであります。

三、本書は特種の編輯がしてあります。之は海軍實用書翰文としての特長を
遺憾なく發揮する爲に特に工風したものであります。乃ち書翰文に付い
ての一般心得及各部の注意書は劈頭に之を記載して参考となし。次に「
團内通信」「艦内通信」「轉乘轉勤通信」「練習生の書簡」「進級任官
通知」「祝慶賀状」「見舞状」「満期前後の書簡」「寄港地通信」「満
期の際の挨拶」といふ順序に記載してあります。

四、「團内通信」の項は入團通知及禮状、四等兵（新兵）の書簡、定員の書
簡、補充兵の書簡等に區分して書き、「艦内通信」は乗艦通知、豫備艦
勤務員の書簡、艦隊勤務員の書簡、「轉乘轉勤通知」は轉乘通知、轉勤

通知、「練習生の書簡」は在校中の書簡、卒業前後の書簡等に區別して書き、「進級任官通知」は進級通知、任官通知に別け「祝慶賀状」の項には、進級又は任官の祝賀状、練習生入校又は卒業の祝賀状、年賀状等が書いてあります、又「見舞状」の項には、傷病見舞、暑中見舞、寒中見舞、火事見舞の文例を書き「満期前後の書簡」は満期前と満期後に別けて書いてあります。而して此處に満期後の書簡といふのは主に満期禮状をいふのであります。又「寄港地通信」は本州太平洋沿岸、本州日本海沿岸、四國、九州、北海道、樺太、琉球及臺灣、朝鮮、關東州諸の中、主なるもの七十港を選んで、各地に於けるいろ／＼の通信文を書いてをきました。尙、此の通信文は書翰文としての體形を整へてゐないも

のが可なりあり従つて書翰文としてよりは寧ろ寄港地案内としての方が價值が多いかも知れません。次に本書の最後に記載してある「満期の際の挨拶」は書翰文ではありませんが海軍満期者の御参考として書いたものであります。即ち本書を御購讀下さる海軍々人は其の大部分の人が早晩満期を取らるゝのでありますから之も無意義で無いと思つて書いて置いた次第です。

五、本書の文例は、利用する場合に應じて、頭語や、時候の挨拶、年月日、宛名、結文等を書き替へれば直ちに諸士の書いた手紙として申分の無いものが出来ると思ひます。尙、文飾等、本書の文例より以上によい字句が他にあつたなら之を訂正すれば益々立派な手紙が書けることでしやう

要するに之は諸士の文才と工風に俟つことが大であります。

六、著者は本書の執筆に當つては並々ならぬ努力を傾注いたしました。何分にも海軍を出てから相當の年月を経過してゐますので寄港地通信等を書くに際しても稍記憶の薄らいだところがあつて、相當書き難い点もありましたがウンとガンバツて書きました。又海軍に於ける日課の工合も著者が在役當時より多少變つてゐるところがあるかも知れません。従つて本書の文例内容と現在と多少異つてゐるところがあるやも計られず此の点御諒察を願つて置きます。

七、本書を参考として手紙を書かれる場合は先づ目次に據つて自分の書かうとする書翰文例のある頁を検べて次に其の記載の頁を展げて見らるゝや

うにせられたが繁劇なる勤務に従事せらるゝ諸士にとつては時間の經濟にもなり便宜であると思ひます。

八、最後に、國防の第一線に立ちて護國の大任を完ふさるゝ我海軍將士の御健在を御祈り申上とす。

終り

於級進社 片山米造

海軍實用書翰文 目次

書翰の心得

書翰の目的……………	一
軍人の書翰……………	二
長い手紙を書かうとするな……………	三
手紙は素直に書くがよい……………	六
相手に依つて言葉を選べ……………	八
亢奮してゐる時は手紙を書くな……………	一〇
返信は直ぐ書いて出せ……………	一〇
用件は書き漏さぬ様順序を立て、書け……………	一一
書翰の禮法や書式は是非心得て書け……………	一二

書翰文の文體と其の應用

候文と口語文……………	一四
海軍々人と候文……………	一六
海軍々人と口語文……………	一七

書式と禮法

卷紙に書く場合……………	一九
書簡箋に書く場合……………	二四
ハガキに書く場合……………	二七

和封筒の表書と裏書……………三一
 洋封筒の表書と裏書……………三三
 用紙と封筒……………三五
 墨とインキの用ひ方……………三六
 手紙の封じ方……………三七

日附の書き方

いろいろの日附……………三九
 正式の日附……………四〇
 略式の日附……………四〇

署名

一般的の署名……………四三
 同輩や目下に對する署名……………四三

近親者に對する署名……………四三
 身分併記の署名……………四四
 數人(連署)の署名(宛名のある場合)……………四四
 數人(連署)の署名(宛名の無い場合)……………四四
 夫婦、親子兄弟等の連署……………四五

宛名

上官に對して書く宛名……………四六
 同輩に對して書く宛名……………四八
 目下に對して書く宛名……………四八
 師長に對して書く宛名……………四九
 團體に對して書く宛名……………五〇
 先方の附隨者に對して書く宛名……………五〇
 連名に對して書く宛名……………五一
 艦船乗員、分隊員に對して書く宛名……………五二

脇付の書き方

書中宛名の脇に書くもの……………五四
 封筒に書くもの……………五七

自他の呼稱

自分の卑稱(みづからいふとき)……………五九
 自分方に屬する人達の卑稱(自分の方を人に對していふとき)……………六二
 相手の尊稱(相對していふとき)……………六三
 相手方に屬する人達の尊稱(相手方のをいふとき)……………六六
 自他住地の呼稱……………六八
 自分の住地を人にいふとき……………六八
 人の住地を對していふとき……………六八
 自他住居の呼稱……………六九

自分の住居を人にいふとき
 其の人の住居を對していふとき
 自他手紙の呼稱……………七〇

自分方の手紙をいふとき
 相手方の手紙をいふとき

口語文と候文の對照

(ます)の付く言葉……………七二
 (ますか)の付く言葉……………七五
 (ますが)の付く言葉……………七五
 (ますから)の付く言葉……………七六
 (ますけれども)の付く言葉……………七七
 (ますれば)の付く言葉……………七七
 (ますならば)の付く言葉……………七八
 (ますまい)の付く言葉……………七八

(ますな)の付く言葉……………七九
 (ました)の付く言葉……………七九
 (ましたが)の付く言葉……………八〇
 (ましたか)の付く言葉……………八〇
 (ましたけれど)の付く言葉……………八一
 (ましたから)の付く言葉……………八二
 (ましたさうで)の付く言葉……………八二
 (ませう)の付く言葉……………八三
 (ませうか)の付く言葉……………八四
 (させませう)の付く言葉……………八五
 (ませうとも)の付く言葉……………八六
 (下さいませ)の付く言葉……………八六
 (ませぬ(ん))の付く言葉……………八七
 (ませぬ(ん)か)の付く言葉……………八八

候文句章の用ひ方

上輩に對する場合……………八九
 同輩に對する場合……………八九
 下輩に對する場合……………八九

起筆の挨拶用語

發信の用語……………九二
 返信の用語……………九三
 初信の用語……………九四
 再信の用語……………九五
 急信の用語……………九六
 前略の用語……………九六

時候の挨拶用語

一月の用語……………九七
 二月の用語……………九八
 三月の用語……………九九
 四月の用語……………一〇〇
 五月の用語……………一〇一
 六月の用語……………一〇二
 七月の用語……………一〇三
 八月の用語……………一〇四
 九月の用語……………一〇五
 十月の用語……………一〇六
 十一月の用語……………一〇七
 十二月の用語……………一〇八
 季節外の用語……………一〇九

安否の挨拶用語

個人宛先方の無事を祝す用語……………一一〇
 個人宛無事を假定して祝す用語……………一一二
 個人宛先方の安否を尋ねる用語……………一一三
 團體宛先方の繁榮を祝す用語……………一一四
 自分の無事を述べる用語……………一一五

陳謝感謝の挨拶用語

無沙汰を詫びる用語……………一一六
 種々の御禮用語……………一一七
 種々の御詫用語……………一一九

本文の起詞

いろいろの起詞……………一三二

結文の挨拶用語

- 本文の要點を繰返して結ぶ挨拶用語……………一二二
- 後便又は面會を期して結ぶ挨拶用語……………一二四
- 返事を求めて結ぶ挨拶用語……………一二五
- 幸福を祈つて結ぶ挨拶用語……………一二六
- 健康を祈つて結ぶ挨拶用語……………一二七
- 傳言を頼んで結ぶ挨拶用語……………一二八
- 傳言を付け加へて結ぶ挨拶用語……………一二九
- 言譯をして結ぶ挨拶用語……………一二九

結語の書き方

- 普通の意味に用ひる結語……………一三〇
- 鄭重の意味に用ひる結語……………一三一
- 陳謝の意味に用ひる結語……………一三一
- 返信のみに用ひる結語……………一三一

書簡の添書

添書の起詞……………一三二

團内通信

- 入團通知及禮狀……………一三五
- 無事入團を報ず(例一)……………一三五

- 無事入團を報ず(例二)……………一三六
- 無事入團を報ず(兩親へ)……………一三七
- 無事入團を報ず(親しき友へ)……………一三八
- 無事入團を報ず(親戚へ)……………一四二
- 無事入團を報ず(市町村長へ)……………一四三
- 無事入團を報ず(小學校長へ)……………一四四
- 無事入團を報ず(兄へ)……………一四六
- 艦船乗組の同郷出身先輩に入團を知らせる……………一四七

四等兵(新兵)の書簡

- 入團當日の様子を知らす文(兩親へ)……………一四九
- 入團式の模様を知らす(友へ)……………一五五
- 衣類の返送を通知す……………一五八
- 日課の模様を家族へ知らす……………一五九
- 衣食の状況を母に知らす……………一六四

定員の書簡

- 短艇撓漕の模様を友へ報ず……………一六六
- 海兵團の繪葉書に書く……………一七〇
- 鎮守府の繪葉書に書く……………一七一
- 集會所の繪葉書に書く……………一七一
- 停車場の繪葉書に書く……………一七二
- 海軍へ志願する友へ兵種を知らす……………一七二
- 新兵卒業、艦船へ乗組の趣きを報ず……………一七六
- 寫真を送る……………一八〇

補充員の書簡

- 團内より父母に近況を報ず……………一八一
- 團内より軍艦の友へ……………一八二
- 海軍記念日の模様を知らす……………一八四

補充員の使命を報ず……………一八七
 特別陸戦隊へ轉勤を報ず……………一八八

艦内通信

乗艦通知
 一般向の乗艦通知(例一)……………一九一
 一般向の乗艦通知(例二)……………一九二
 乗艦を父母に報ず……………一九三
 繪葉書に書く乗艦通知……………一九四

豫備艦勤務員の書簡(防備戦隊(警備戦隊)を含む)

艦内生活の状況を報ず……………一九五
 艦内生活の所感を報ず……………二〇〇
 軍艦旗を仰ぎて……………二〇二

豫備艦の友へ歸港を報ず……………二二五
 石炭搭載……………二二六
 休暇歸省を報ず(両親へ)……………二二七
 短艇競漕……………二二九

轉乘・轉勤通知及禮狀

轉乘通知

豫備艦より艦隊に轉乘を報ず(父母へ)……………二三三
 艦隊より豫備艦へ轉乘を報ず(父母へ)……………二三五
 豫備艦より豫備艦へ轉乘を報ず
 (故郷の友へ)……………二三七
 艦隊より艦隊へ轉乘を報ず
 (部内の友へ)……………二三七
 豫備艦より艦隊へ轉乘を報ず

軍艦の越年……………二〇九
 軍艦の新年を迎ふ……………二〇六
 冬休暇歸省を家族に知らす
 (第一期休暇人より)……………二一〇
 冬休暇歸省を家族に知らす
 (第二期休暇人より)……………二一一

休暇歸省を故郷の友に知らす……………二一二
 休暇歸省中在艦の友へ……………二一三
 休暇中世話になつた禮狀……………二一五
 夏季休暇歸省を家族へ知らす……………二一五
 夏季休暇歸省中在艦の友へ……………二一六
 水泳練習の模様を知らす……………二一七

艦隊勤務員の書簡

母港出港……………二二一
 母港へ入港を知らす(妻へ)……………二二四

(部内の友へ)……………二三九
 艦隊より豫備艦へ轉乘を報ず
 (陸上部隊の友へ)……………二四〇
 驅逐艦より軍艦へ轉乘を報ず……………二四二
 軍艦より驅逐艦へ轉乘を報ず……………二四三
 前乗艦分隊員への禮狀……………二四四

轉勤通知

艦船より海兵團へ轉勤を報ず……………二四五
 艦船より防備隊へ轉勤を報ず……………二四六
 陸上部隊より艦船へ轉勤を報ず……………二四七
 陸上部隊より陸上部隊へ轉勤を報ず……………二四八
 轉勤前世話になつた人達への禮狀(例一)……………二四八
 轉勤前世話になつた人達への禮狀(例二)……………二四九

練習生関係の書簡

練習生入校前の書簡

- 練習生として入校を父母に報ず……………二五〇
- 練習生として入校を故郷の友に報ず……………二五二
- 練習として入校を部内の友に報ず……………二五三

練習生在校中の書簡

- 無事入校を報ず……………二五五
- 無事入校を父母に報ず……………二五六
- 入校前の艦船分隊長への禮狀……………二五六
- 入校前の艦船分隊長への禮狀……………二五七
- 練習生勤務の状況を部内の友に報ず……………二五八
- 練習生より父母へ……………二六一

練習生卒業前後の書簡

- 練習生卒業を父母に報ず……………二六三
- 練習生卒業を故郷の友に報ず……………二六四
- 練習生卒業を部内の友に報ず……………二六五
- 乗艦後教官又は教員への禮狀……………二六六

進級・任官通知

進級通知

- 進級を父母に報ず……………二六八
- 進級を部内の友に報ず……………二七〇

任官通知

- 任官を父母に報ず……………二七一

- 任官を親戚に報ず……………二七二

祝慶賀狀

進級又は任官の祝賀狀

- 進級を祝す……………二七三
- 同返事……………二七四
- 友の進級を祝す……………二七五
- 先輩の進級を祝す……………二七五
- 任官を祝す……………二七六

練習生入校及卒業の祝賀狀

- 練習生入校確定を祝す……………二七七
- 練習生入校を祝す(例一)……………二七八
- 練習生入校を祝す(例二)……………二七九

年賀狀

- 右返事……………二八〇
- 練習生卒業を祝す……………二八〇
- 右返事……………二八一
- 簡單なる年賀狀(葉書)……………二八四
- 一般的の年賀狀……………二八五
- 上官(先輩)への年賀狀……………二八七
- 友人への年賀狀……………二八七
- 喪中の年賀狀……………二八七
- 年賀狀の返事……………二八八

見舞狀

傷病見舞

負傷せる友を見舞ふ……………二八九
 病氣入院中の友を見舞ふ……………二九〇
 入院の友を見舞ふ……………二九〇

暑中見舞

一般的の暑中見舞状……………二九一
 父兄への暑中見舞状……………二九三
 親戚への暑中見舞状……………二九四
 部内の友への暑中見舞状……………二九五
 故郷の友への暑中見舞状……………二九六
 暑中見舞状の返事……………二九七

寒中見舞

寒中見舞状(例一、二、三)……………三〇〇

火事見舞

出火見舞状……………三〇一
 類焼見舞状……………三〇二
 近火見舞状……………三〇三

満期前後の書簡

満期前の通信
 再役を相談する……………三〇四
 服延を知らず……………三〇五
 満期の爲退艦を知らず……………三〇六
 満期前の團内生活の模様を報ず……………三〇七
 満期歸郷を郷里の友に報ず……………三〇八

満期後の通信

在役中世話になつた人達への禮状……………三〇九

満期前の乗艦分隊員への禮状……………三一二
 元の上官に對する禮状……………三一三
 歸郷後の模様を知らず……………三一四

寄港地通信

本州太平洋沿岸 (下關より青森まで)

下關便り(山口縣)……………三一八
 三田尻便り(山口縣佐波郡)……………三一九
 徳山便り(山口縣都濃郡)……………三一九
 新湊便り(山口縣玖珂郡麻里布町)……………三二一
 宮島便り(廣島縣佐伯郡)……………三二二
 吳便り(廣島縣)……………三二三
 神戸便り(兵庫縣)……………三二四
 大阪便り(大阪府)……………三二五

和歌の浦便り(和歌山縣海草郡)……………三二六
 串本便り(和歌山縣東牟婁郡)……………三二七
 伊勢便り(三重縣)……………三二八
 名古屋便り(愛知縣)……………三二九
 清水便り(静岡縣)……………三三〇
 下田便り(静岡縣加茂郡)……………三三〇
 館山便り(千葉縣安房郡)……………三三一
 横須賀便り(神奈川縣)……………三三二
 横濱便り(神奈川縣)……………三三二
 松島便り(宮城縣宮城郡)……………三三三
 宮古灣便り(岩手縣下閉井郡)……………三三四
 大湊便り(青森縣下北郡)……………三三五
 青森便り(青森縣)……………三三五

本州日本海沿岸 (土崎より油谷灣まで)

土崎便り(秋田縣南秋田郡)……………三三七

四國諸港 (三津ヶ濱より土佐沖を経て)

- 三津ヶ濱便り (愛媛縣温泉郡) 三五〇
- 大三島便り (愛媛縣越知郡宮浦村) 三五〇
- 多度津便り (香川縣仲多度郡) 三五〇
- 小豆島便り (香川縣小豆郡) 三五二
- 小松島便り (德島縣勝浦郡) 三五三
- 高知便り (高知縣) 三五三
- 宿毛便り (高知縣幡多郡) 三五四
- 宇和島便り (愛媛縣) 三五四

九州諸港 (博多より長崎を経て別府まで)

- 博多便り (福岡縣) 三五五
- 佐世保便り (長崎縣) 三五六
- 長崎便り (長崎縣) 三五八
- 鹿兒島便り (鹿兒島縣) 三五九

- 酒田便り (山形縣飽海郡) 三三八
- 佐渡便り (新潟縣佐渡郡) 三三八
- 新潟便り (新潟縣) 三三九
- 直江津便り (新潟縣中頸城郡) 三四一
- 伏木便り (富山縣射水郡) 三四一
- 七尾便り (石川縣鹿島郡) 三四一
- 小濱便り (福井縣遠敷郡) 三四二
- 敦賀便り (福井縣敦賀郡) 三四三
- 舞鶴便り (京都府加佐郡) 三四四
- 宮津便り (京都府與謝郡) 三四五
- 境港便り (鳥取縣西伯郡) 三四七
- 美保關便り (鳥根縣八束郡) 三四七
- 杵築便り (鳥根縣簸川郡) 三四八
- 油谷灣便り (山口縣大津郡) 三四九

北海道諸港

- 志布志便り (鹿兒島縣噺唎郡) 三六〇
- 佐伯便り (大分縣南海部郡) 三六〇
- 別府便り (大分縣) 三六一

- 函館便り 三六四
- 室蘭便り 三六六
- 根室便り (根室郡) 三六八
- 小樽便り 三六八

樺太諸港

- 大泊便り (大泊支廳大泊郡) 三七〇
- 真岡便り (真岡支廳真岡郡) 三七〇

琉球及臺灣諸港

朝鮮諸港

- 那霸便り (中城灣に入港して) 三七一
- 基隆便り (臺北州基隆郡) 三七二
- 高雄便り (高雄州高雄郡) 三七三
- 馬公便り (澎湖島) 三七四

關東州諸港

- 元山便り (咸境南道) 三七七
- 釜山便り (慶尙南道) 三七八
- 鎮海便り (慶尙南道) 三七九
- 馬山便り (慶尙南道) 三八二
- 仁川便り (京畿道) 三八三
- 鎮南浦便り (平安南道) 三八六
- 大連便り (遼東半島) 三八七

旅順便り(遼東半島)……………三九〇

満期の際の挨拶

出發驛で見送り人に述べる挨拶……………三九三
歸着驛で出迎へ人に述べる挨拶……………三九四
歡迎會に於ける謝辭……………三九五

海軍實用書翰文目次 終り



入團から満期までの

手紙とハガキ文

海軍實用書翰文

片山米造編著



書翰の心得

書翰の目的

書翰文は、其の文の性質や、手紙の長い短いにかゝら

書翰の心得

手紙を書くときは、いつでも相手方のあることを念頭に置き、其の相手方が讀むのに都合よく、わかりよく、感じをよくするやうに書かねばならぬ。

書翰の心得

二

ず、すべて、對談することの出来ない場合に、自分を代表して其の意のあるところを對手方に申送るものであるから、其の文章は普通の文章以上に注意して書き、對手方に自分が申送つた要件とか心持を充分理解して貰ふやうに書かねばならぬ、而して夫れが爲には書翰文を書く上に於て相當な心掛けを要することが數々ある。次に夫れ等の心得ねばならぬ要領事項を順次記述してみる。

軍人の書翰

軍人はいつでも軍人らしい手紙を書きたいものだ。軍人

手紙は後日の證據になるものであるから、其の時そのときの心持ちを書き表すと同時にのち／＼のことまで考へて書くべきものである

は何時何處で身命を賭して御奉公せなければならぬかわからぬものだ。若し自分の死後女々しい手紙でも發見されて世に出たならば、自分の生前日常に於ける心掛の程も疑はれて不慮汚名を受けたり世人の嗤者にならぬとも限らぬ。故に常作坐臥自分は海軍の軍人であるといふ心持を念頭より離すことなく、書翰文を書く場合にも軍人らしい心持と態度とを以て書きたいものである。

長い手紙を書かうとするな

海軍の軍人は狭い艦内生活をなす場合が大部分であり、

筆をとるまでに、書く要件や順序、文の組立等をよく考へて、筆をとつたなら一氣呵成にすら／＼と書いてしまふがよい、さうすれば筆を持つてから考へる要がないから相當長い手紙でも短時間に書き終ることが出来る。

本書に記載する各種の文例のうち、自分が書かうとする手紙に最も類似した文例を参考として書けば、見易く書くことが出来る。但し相手によつて言葉の使ひ方等も相違することであるから之等の点に注意すること。

書翰の心得

四

居住甲板も狭く光線も不十分である場合が多く、猶時間に於ても何時間といふやうな纏つた休憩時間（手紙を書く時間）が無く、何時でも喇叭と號笛の音に耳を傾けてゐて、號令がかゝり次第何はさておいても直ちに飛出して行かねばならぬ忙しい生活を續けて行くものであるから、無暗矢鱈に美辭麗句を並べて長たらしい書翰文を書きかけると中途でいろ／＼な用事が出来たり號令がかゝつたりして終ひまで書いてしまふことが出来ず、再三之を繰返しては中止となり、つひには手紙を書くのが厭になつたり其の機會が得られなくなつたりして、とう／＼

出したい手紙も延び／＼になつて出さずにしまふやうな結果になる。亦書く餘猶のある場合でも、長い手紙はねてして不得要領なものになり易いから、長い手紙を書く際はつとめて順序よく書くやうにせなければならぬ。猶、短い手紙を書く場合でも、文飾の爲にああでない、かうでも無いと心配しかけると却つておつくらになり、むづかしくなり、延ては筆不性になり、交際上の用を缺くことが多くなる。故に手紙を書く場合は對手方に面談するやうな心持ちで、あまりかたくならないやうにして書きかけると案外よい手紙が書けるものである。

書翰の心得

五

但し面談の際以上に、用ひる言葉には充分注意して書かねばならぬ。

手紙は素直に書くがよい

真情の發露するところ
鬼人も泣く、まごころ
を以て書いたものでな
ければ相手に感銘を與
へることは無い。

くすか、くさぬか、よ
いふは、よこすか、よ
こさぬか、呉れるか、
呉れぬか、と云ふ意、

手紙を書くことは左程むづかしいものではない、只素直に正直に自分の氣持を書き表し先方に傳へるやうにすればよい、此處に参考として龜公が書いた「馬代金催促状」の書きつぷりを紹介しやう。

一、金三兩

右馬代、くすか、くさぬか、こりやあどうちや、くす

筆不性は天性の横着で
はない。思ふやうに書
けぬから書くのが厭
なり成る可く書くまい
とする。書かぬから上
手にならぬ。下手なか
ら書かぬ。といふ譯で
あるから。始は上手に
書けなくとも参考書な
どを持つて努めて書く
やうに心がけたなら自
然に上手になり。手紙
を書くのが楽しみにな
る。

といふならそれでよし、くさぬとあらば俺が行く、行くにつけても只おかぬ、龜の腕には骨がある。

これが龜公の馬代催促状の文句である。文飾はないが眞に名文である。真情が溢れてゐて書いた龜さんが見ゆるやうである。特に末尾の一句「龜の腕には骨がある」と啖呵を切つて結んだところに意味深長な凄味がある。

文は劣くとも、字は拙くともま心を以て書いたものは相手方の心を捉へることが出来る。嘘を書かうとしたり、氣取つて書きかけたりするとそれが爲筆が進まなくなり手紙を書くのが大儀になり、不識不知の間に筆不性になる。

る、のみならずたま／＼書いても相手方を感動させるやうなものを書けない。だから相手方の感情を害はないやう言葉使に注意して有のまゝを素直に書くべきである。

相手に依つて言葉を選べ

書翰文は對手の人と話をしてゐる心持で書かねばならぬものである。従つて目上の方には勿論、同輩又は目下の人にも、用ひる言葉を充分吟味して書き、先方の感情を害せぬやう、讀む人をして快感と親しみを感ぜさせるやうな文章を書く工夫をせなければならぬ。即ち對談する

自分でも意味のハツキり解せぬやうな曖昧の文句を書くのは禁物である。外來語の新らしいもので一般に通用してゐない所謂時代の尖端を行くやうな人でないと一寸わかり難いやうな言葉は御互に親しい友達同志ならばよい場合もあるが、目上の人や目下の者には絶対用ひてはならない。

とき對手の身分に依つて言葉使ひを變へなければならぬと同様に、宛名人の身分や境遇、男女老幼、交際の親疎等によつて用ひる文言の適當なものを撰んで書くやうにする。猶、讀む人の知識の程度を察して用ひる字句も選擇しないと切角手紙を出しても其の意味を先方で理解して呉れないことがある。書翰文を書くときには馬鹿町寧にならぬ程度で敬意と愛情をこめ、目上の人には勿論同輩や目下の人に對しても夫れ／＼適應する言葉や字句を用ひることが肝甚である。殊に難解の漢字や外來語を用ひることは對手にもよるが概してよくない場合が多い

返事を書くときは先方から来た文面を何回も読んでみて、先方の眞意が那邊にあるかをよく確めてから書くやうにせないと間違を生ずることがある。

亢奮してゐる時は手紙を書くな

怒つてゐるときや感情の充奮てゐる場合は手紙を出した後で往々後悔することがあるから、なるべく頭を冷靜にしてから書くやうに心懸けねばならない。特に返信を認める際は此の心懸を忘れてはならない。

返信は直ぐに書いて出せ

先方から手紙が来て其の返信を要する場合は直ぐ返信を書いて出すやうにする。一寸のばし、一日送りにしてゐ

手紙を出して返信を求めたとき、その返信がいつまでも来ないと實際シヤクに觸るものだ亦切角返信が届いても内容が不得要領のものであつたなら何の爲の返信やらサツパリわからない、こんなときは文は下手でも、字は拙づくとも、よく解るやう要領よく書いてほしい。

るとついに先方から来た手紙の内容を忘れたりして返事を書く機会を失つてしまふことがある。すべて返信を要するときは、先方でも今日は返信が来るか明日は来るかと待つてゐるものである。夫れをいつまでも返信を出さないでゐると相手方の感情を害ねることが往々ある。亦返信を書く場合は相手方より申越した返信として少しの質疑も生ぜないやうにはつきりと書いて出すがよい。

用件は書き漏さぬ様順序を立て、書け

傳へねばならぬ用件はよく考へて順序を立て、書き、書

読んでみて字句の間違ひや要件の脱漏があつたやうな場合、あちらこちらを消したり、ところどころに書き添へたりして文面を汚すのは相手方に失禮にもあたり讀む人の感じもよくないからこんなときにはアツサリ書き替へてしまふことである。

書翰の心得

一一二

書き漏さぬやうにせねばならぬ。無駄な字句を使つたり、書き漏したりしてはならぬ。夫れが爲には書き終つたら始めから終ひまで一と通り讀んでみて字句の間違ひや用件の書き洩らしがないかよく確めて、然る後投函すべきである。

書翰の禮法や書式は是非心得て書け

書翰の禮法や書式は是非心得てゐて之を守り、相手方に禮を缺かないやうにせなければならぬ。文は達意を主眼として多少の文飾を施すやう心懸け、なるべく新し味と

なんでも知つてゐて悪いことばない、特に手紙を書くときの禮式や書式は知つてゐてよいこんなことは誰でも知つて居るといふ人があつても、實際世間には知つてゐる人より知らない人の方が多。

旨味のあるやうに用語に意を用ひ、讀む人をして快感裡に自分の申送つた用件を會得さすべきである。徒らに齒の浮くやうな美辭麗句を並べたり、難かしい文句や外來語などを書き連らねることは害あつて益ないことである。猶、文字は拙なくとも誰が讀んでも解るやう丁寧に書き決して自家獨流に字をくずして書いたりしないがよい。譯もわからず無茶苦茶に字をくづして書いた手紙を判じ讀みするのは實に不快なものである。

書翰の文體と其の應用

書翰の文體と其の應用

一一三

候文は目上の人や儀式張つたときに書くとき、口語文は親しい友や近親の間柄によい。候文は口語文に比べて稍厳格な感じを與へるものである。口語文は嚴肅な感じは與へないが親しみがあ

候文と口語文

書翰文の文體には候文と口語文の二種類がある。候文體は手紙文として我々祖先から長い間用ひられてゐるのみでなく、書式、禮法、文語總てが手紙に當嵌つてゐる様に出來てゐるから手紙文といへば候文のことだと思つて居る人も少なくないが、口語文の手紙も近頃大いに書かれてゐる。此の両者は夫れ々長所や短所を有するもので何れの可否も決することは出來ない。要は書く人と書く場合及之を受取つて讀む人の如何によるものである

候文は一般に文章を簡潔に要領よく書くことができ敬意を失はず禮式に叶つたやうに綴ることが出来る特長がある。けれ共多少候文を扱ひつけたものでなければ其の表現法がむづかしい。口語文は話をすると同様に書くのであるから書簡文の組立方さね知つて居れば左程洗練されたものでなくとも書くことが出來自分の感情を充分に書き表すに餘り苦心を要しない特長がある。而し其の文章は稍ともすれば柔かくなりすぎる感じがして目上の人や儀式張つた書簡文としては適當なものが書き難く又文章が長たらしくなり繁劇なる勤務に従事するものの手紙に

は餘りに時間を要する爲實際書きづらい缺點もある。

海軍々人ご候文

海軍の軍人は忙しい。忙しい者は何事でもなるべく簡単に片付けたい、くどくしいことは大禁物、そこで候文で手紙を書くやうにすると簡単に書くことが出来、字數も、紙面も時間も最少限度でこと足り日常手紙のやりとりにもこと缺かず圓滿にやつて行けるのだから至極便利である。

候文は簡単に自分の心持を書き表すことが出来従つて字數と紙面と時間を少なくて書くことができる故、繁劇多忙なる勤務に従事する海軍軍人には最も適當したる文體であると思ふ。例へば口語文で『有難う御座いました』と書くべきところでも、候文では『有難く御座候』と短く書くことが出来る。故に著者は成る可く候文の書翰文を書くやう努められむことをお薦めする。其の意味で本

書の文例も主として候文を用ひてある。

海軍々人ご口語文

海軍の軍人相互間には一種特別の挨拶の仕方がある、一般社會人の様に、今日は……お寒う御座います、とか、お暑い時分となりました、などと云はない。會へば時候の挨拶も無沙汰のわびもあつたものでない。いきなりお互が「ヨウウ……」「ドウカ」位が口唇を突いて進む。之で一切合財の挨拶が終つたこととなる。海軍部内の

海軍々人には原則として候文を御薦めするが、時と場合に依つては口語文の方が適當することがある。例へば、親しい同年兵に出す手紙などには『拜啓陳ば春暖の候に御座候處 貴兄益々御健勝にて御勤務在之候哉』などと書くよりは『拜啓春もぼか／＼暖い時候であるが貴兄は相變らず益々丈夫で精勤にやつてるか』など書いた方が懐し味がある。要するに口語文は極く親しい問柄で少々

お互同志の間柄なれば
 いくら親しい友達でも
 あまり親しくせない同
 僚でも充分是れでこと
 足るのである。日常
 の交際工台が之である
 から、其の取り交す手
 紙にも社會人とは一種
 異つた文章が出来上る
 のも不可思議ではない
 のみならず。それが眞
 實の姿を反映するもの
 であるかもしれぬ。

亂暴な文語を用ひても差支へ無いやうな場合に用ひると
 かへつて面白味と恬淡味がある。即ち、御互に別々の艦
 に乗込んで艦隊勤務にあるものが港へ入港してひよつこ
 り上陸場で遭遇ひ互に肩を叩いて『甲』ヨウ貴様丈夫
 か、『乙』ヨウ貴様まだ生きてたか、なんかと挨拶し
 て互に朗かに笑ひ心の中に何のわだかまりも無いやうな
 親しい友などには候文よりは却つて口語文でざつくばら
 んに書いた方がよい場合が多いから、こゝにいふ際には大
 いに大膽に書いて見ることである。而し此の場合でも『
 親しい中にも禮儀あり』といふ譬を忘れてはならぬ。

書式と禮法

手紙を書くには一定した認め方がある。いくら文章がう
 まく文字が上手でもその認め方が悪ければ先方に對して
 失禮にもなるし、第一讀んだ人に、何んだ軍人なんて手
 紙の認め方も知らないのか、などと笑れなければならな
 いから次に其の認め方に就て述べることにする。

卷紙に書く場合

従來の卷紙に認める場合の心得を遂條箇條書きにしてみ

卷紙にインキを以て書
 いた手紙を受取ること
 があるが之は間違であ
 る。卷紙には必ず墨で
 書くものである。

ると次のやうな諸点である。

- 一、卷紙の書き初めから四五寸位の間に紙の縦目があれば失禮になるから切り取つてから書き初めること、書き終れば真直に折つて切ること。

- 二、卷紙に書く場合は天（上）と地（下）と口（書き初め）と奥（書き終り）に餘白を置くことである。此の餘白の寸法には別段嚴格なる規定は無いが、古今諸家の示されたる方式は、天の餘白四五分、地の餘白二三分、口の餘白正式は三寸、略式は二寸位、奥の餘白は正式二寸、略式は一寸五分位、となつてゐる。

餘白の寸法は曲尺による。餘白の寸法は手紙の長短、文字の大小等に依つて餘白を少しづつ廣くしたり狭くしたりするやうにせなければ不態裁なものになる

るから之に準據して書く（第一圖參照）

- 三、日附（月日）は本文より一字位下げて書く（第一圖參照）

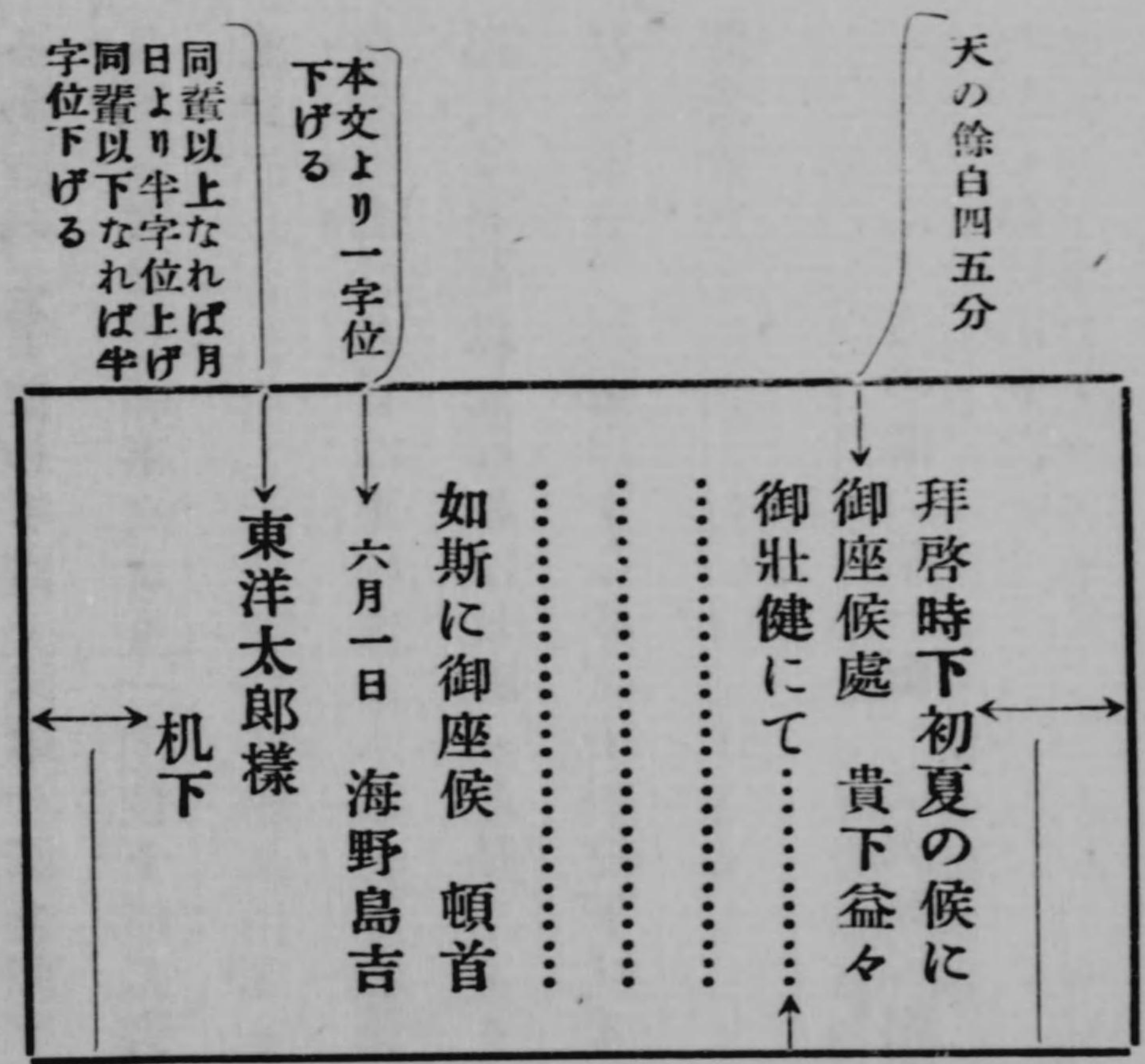
- 四、自分の名は月日の下に書く（第一圖參照）

- 五、宛名は同輩以上なれば日附（月日）よりは半字位上げて書き、同輩以下なれば半字位下げて書く（第一圖參照）

卷紙の認め方の圖（第一圖）は次頁に記載して置いたから御覽ありたい。

署名は日附の下に巻紙の中部より下に書き本文の下端と署名の下端と揃へる。但し日附が長く下に延びるときは左に外して書いてもよい。

【圖 一 第】



口の餘白正式三寸、略式二寸位
地の餘白二、三分
名は月日の下に書く
奥の餘白正式二寸五分、略式一寸五分位

行尾とは一行の書き終り、行頭とは一行の書き始めてある。凡而敬意を表す字は行尾に書いてはならぬ。文句の「終り」「むすび」になる字句は行頭に書かぬやうにする。

- 六、「御」「奉」「尊」「貴下」などの字を行尾に書いてはならぬ。若し字配りの関係で行尾になりさうな場合は其のところはあけて次の行頭に書くやうにする。
- 七。「候」「趣さ」「旨」「ます」「ました」などの語字を行頭に書いてはならぬ。若し行頭になりさうな場合は前行の行尾に小さく書き添へる。
- 八、假名字は物の名稱でない限りなるべく行頭に出さぬやうにする。
- 九、熟語や成句になつたもの及び數字や金額、人名等は

二行に割書きわりがしてはいかぬ。之は切れ字きりじといつて手紙には忌いまれてゐる。例へば「分隊長」と書く場合に「分隊」と行尾に書いて「長」を次の行頭に書いたり「五百噸」を「五」と行尾に書いて「百噸」と次の行頭に書くの類である。「而し「軍艦赤城」といふのを「軍艦」と行尾に書いて、「赤城」と次の行頭に書くのは差支さしつかえない。

書簡箋に書く場合

書簡箋しょかんせんに書く場合は、公用文かうやうぶんの様式やうしき、私信ししんの様式やうしき、洋式やうしき

書簡箋にはいろ／＼の種類があるが一般に我々が便箋といつてゐるものである。色合も白

桃色、青の薄色等種々あり、寸法も大きい判や小さな判と種々あるが、軍人には白で相當判の大きいものがよく用ひられてゐる。

公用文は一般に使用する便箋の類を用ひないで特別に印刷したる書簡箋を用ひられることが多い。

公用文の認め方

昭和十年六月一日 軍艦長良副長
〇〇海兵團副長殿
御照會相成候何何ノ件左ニ御回答
申上候
一、……………
右ノ通ニ候也

からとつた様式等種々雑多である。今此の中の主なる様式を圖示して参考に資することとする。猶、書く上に於てのいろ／＼の心得は巻紙まきがみに書く場合の「六」以下と同じであるから参照されたい。

公用文は一般に、日附、宛名及署名は上圖の如く初めに書く。上記の書式によるときは臨付はいらぬ。

歐文は別であるが、和文の手紙を書く場合は縦書きにすべきで横書きにすべきものではない。若し強いて横書の必要がある場合は左から右へ書く。

方め認の信私 二

拜啓青葉馨る初夏の候に御座候處
貴兄愈々御健在にて農事に御勉勵
致し居られ候や……………
……………
早々
六月三日
淺海島太郎
深海鯛之助様
机下

「拜啓」は別行に書いてもよい又「拜啓」の下を一字あけてもよく、上記のやうにつめて書いても差支へない

三、洋式からとつた私信の認め方

此の書き方は主に口語文の私信に限られる私信の認め方で、候文を書くときは此の書式を用ひない。

洋式から採つた私信の認め方は、極く親しい間柄に用ゆるもので、儀式張つた手紙や、上官に出す手紙には用ひるべき書式でない。

方め認の信私とらか式洋

濱松景太郎君
昨夜は態々御越し下されたのに何の愛想もせず實に濟まなんだ、赦して呉れ給へ
御存じの通り愚妻風邪の爲……………
……………
先は不取敢御詫まで
不一
六月十日朝出す
神田彌五郎

ハガキに書く場合

ハガキに書く書翰文は極く簡単なもので誰に讀まれても

私製ハガキの表三分ノ一の下方に横線を引き其の下に通信文を書くのは違反でないが官製葉書の場合は違反となる。

官製葉書の不用になつたものの印刷した切手の部分が汚れてゐないとき、之を利用するつもりで該切手の部分を切り取つて繪葉書等に貼付して出すやうなのは利巧さうな不心得者である。而し此の者は

差支へないものでなければならぬ。

ハガキは略式のものであるから高貴の人や上官に對して用ひてはいけなない。

通信文は裏に字配りよく書き、初めの書き出しと終り頃の字と大きさの差があるやうなのはよくない。

官製葉書の表（宛名を書く面）には通信文を書いてはいけない、此處に通信文を書くとき郵便法違反となり先方で倍額の料金をとられる。

官製葉書の切手の部分を切り取つて私製葉書に貼るのも違反であるから通用しない。若しこのやうなことをして

違反になることを知らないからである。よく記憶してゐて間違をおこさないことが肝要である。

たとへ、簡単な文章であつても上官や目上の人に出す書簡は封書に認むべきである。

ハガキには脇付はいらぬ。但し「至急」とか「急用」とかは書いてもよい。ハガキに親展などを書くものがあれば全く無茶苦茶の出鱈目である。

ハガキを出すと先方で倍額の料金を徴集されるから受

取つたものは多大の迷惑をする。注意すべきことだ。

往復ハガキは、返事が要るが先方にハガキ代まで出させてはすまなないと思ふときに用ふるもので、自分は往信の方に書いて出す。

ハガキには總て簡単に要領よく書かねばならぬ。

(裏) 合場く書に書葉

拜啓貴社益御隆昌の段奉賀候
 借而、貴社御發行の圖書
 昭和十一年海軍日記 一冊
 右至急御送附下され度代金は着本後送本料金共
 御支拂申可候就ては送本と同時に振替用紙一枚
 同送下され候はゞ幸甚の至りに御座候
 先は御願まで
 不一

十一月二十日

ヘガキでも封書でも自
 分の居所は最も明瞭に
 書き「吳國ニテ」等書
 くのはよくない。
 居所を書く際、軍艦の
 上に「大日本」とか又
 は分隊の下に「前部發
 電氣室」等を書くのも
 よくない。乃ち「軍艦
 赤城第三分隊」等と書
 くやうにする。
 但し書簡箋の本文終り
 に「吳國ニテ島洋太郎
 」等と署名して出すの
 は差支ない。

書葉の書表

き が は 郵 便

吳市泉場町二十二番地

級 進 社 様

軍艦山城第一分隊

島 洋 太 郎

和封筒の表書と裏書

おもてがき あてな まごころはんち かしらじ
 表書は宛名を所番地の頭字より少し下げで所番地の文字

書式と禮法

封筒の所書は二行に書いても差支ない。

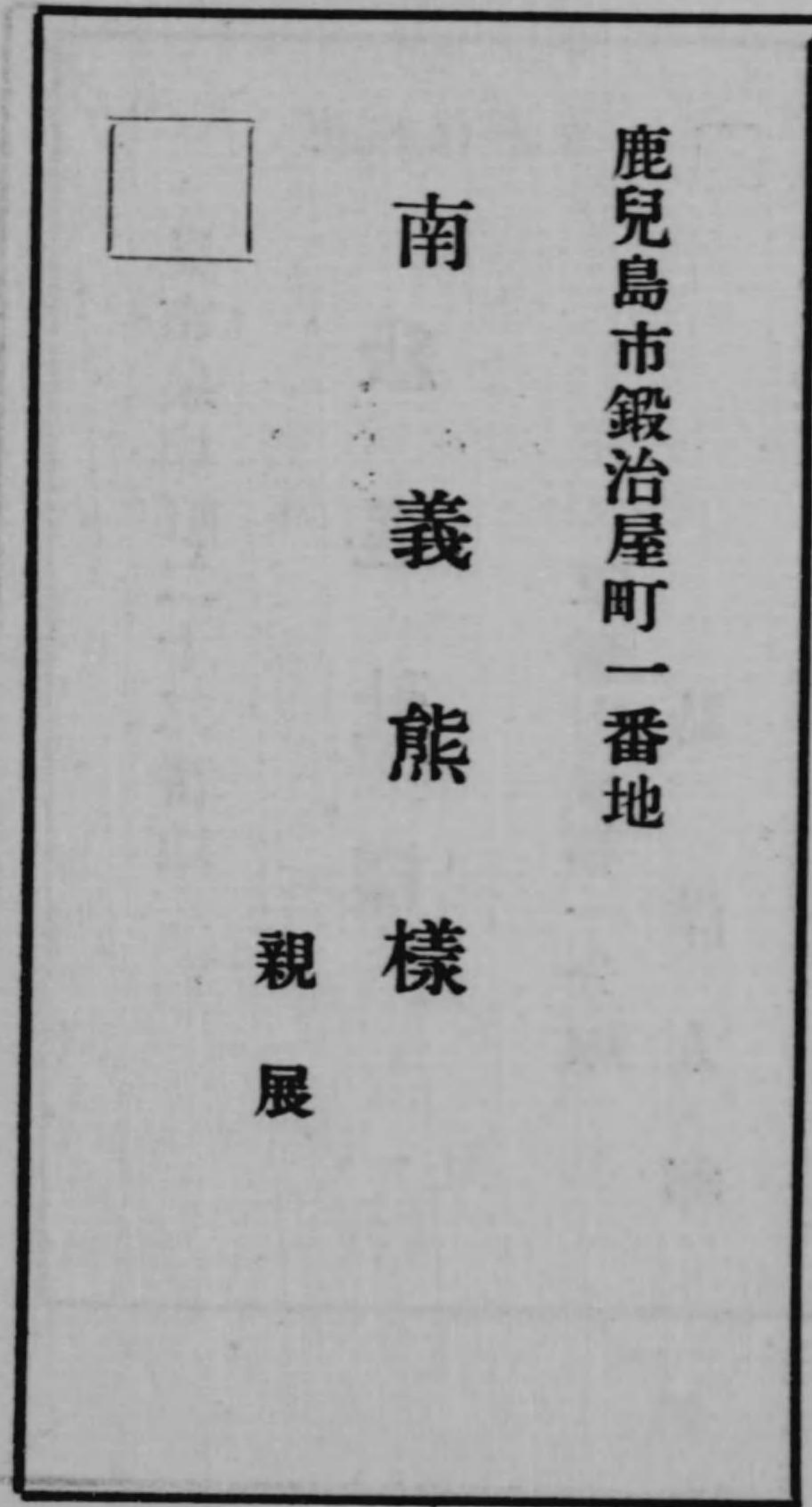
市の場合には縣名を書かない乃ち鹿兒島縣鹿兒島市とは書かない。但し若松市の如く全國に同名の市が二つ以上ある場合は縣名を書く。切手は左上に正しく貼ること。下の方に貼つたりすると消印に不便であるから送達が遅れる事がある。

一般に我々が和封筒といつてゐるのは日本封筒と稱へるのが正しい云ひ方であるが此處にはわかり易く和封筒と呼稱して書いた。吾々が洋封筒又は角封筒と呼んでゐるのは西洋封筒といふのが正しい稱へ方であるが之も洋封筒として記事に書き込んでしまつた。之も讀む人にわかり易いやうにと思つて殊更に日本封筒又は西洋封筒

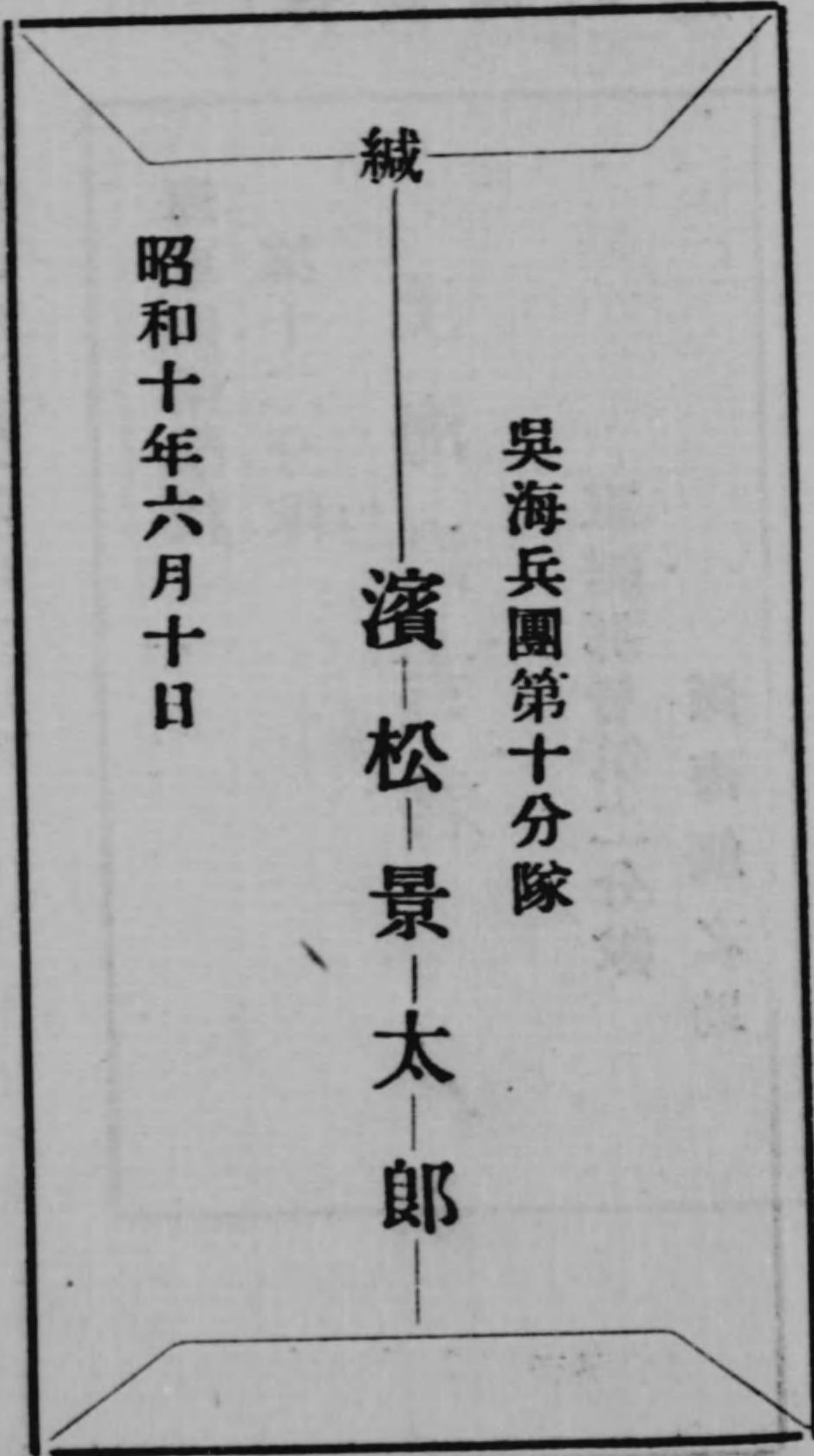
書式と禮法

より少し大きく封筒の中央か若くは幾分左に寄せて書く裏書は名前を封筒の縦目に書く、日附(年月日)は左上に書くのが最もよい。

(和封筒の表書き)



和封筒の裏書き



洋封筒の表書きと裏書き

洋(角)封筒に表書きをするときは封じ目が左になるやうにする。(裏から見て右に開くやうに)

書式と禮法

と書かなんだのである

此の頃洋封筒の裏に居所氏名を書いた手紙をよく見受る。裏に書くのをわるいとは云はぬが書く場合に封じ目にかゝらぬやう書いて置くべきであらう差支へなければ表の左下に小さく書くのが最もよい

書式と禮法

發信人の居所氏名は裏に書かず表の左下方に小さく書くのが正しい書き方であるが裏に書いても差支はない、此の場合には封じ目に自分の住所や氏名及日附等を書かないやうに注意せぬばならぬ。

洋封筒の認

<p>海軍砲術學校 第十二分隊</p> <p>淺海島吉君</p> <p>軍艦那智第二分隊 深海鯛之助</p>
--

(方め)

用紙と封筒

緘

軍人は一般社會の人達のやうに充分なことはかりも云つてをれぬ。時には手帳の端をちぎつて書簡箋代用にし鉛筆の走り書きで手紙を出すやうなこともあらうが、こんな場合は例外で所謂非常時の部類に屬するから論外である。

用紙や封筒はなるべく上質のものをを用ゆべきで何れも白色の無地を以て正式としてある。繪入りや漉入りのあるものは親しい間柄の難信に用ふるもので冠婚葬祭その他儀式張つたときには用ひてはならぬ。ハトロン紙(俗に

書式と禮法

ハガキを書き損じて之を塗りつぶし鉛筆や赤インキなどで書くことはよくない。受取つたものは、なんだケチケチしてと餘りよい感じをおこさない。

茶封筒といつてゐるの封筒などは勿論いけない。ハトロン封筒は會社や官廳等にて印刷して事務用として經濟的に用ふるものである。

墨とインキの用ひ方

墨は巻紙と葉書に使用し、インキは書簡箋と葉書に限られてゐる。

墨色は慶事に濃く凶事に薄く書いたものだが今日ではそんな斟酌なしに墨は濃くすつて滲んだりかすれたりせなければよいといはれてゐる。

インキはブリユール・ブラック（藍色）を用ひ、赤色や紫色で書いてはならぬ。

手紙の封じ方

巻紙なれば文字を内側にして巻紙の奥（書き終りの方）から二寸幅位に折目を付けて畳み（宛名に折目を付けぬ様に）天を上として、折つた端を封筒の表の方に向けて入れ、封をして「封、緘」等の一字を書き附ける。書簡箋は巻紙と同じく文字を内側に、先づ下から上に二ツに折り、次に折目を下として今一度折る（端と端が合ふ様

巻紙の口の方から折ると読むとき一旦展開してしまつてから読まねばならぬから不便である。

巻紙の折目は大体二寸位であるが、封筒が大きいかつり小さかつたりする場合はその封筒の幅よりも少し狭く折るやうにすればよい。

封筒の封じ目に書く文字は、封、メ、緘、占糊、嚴緘等を書くのが普通で、「蓄」などの字を書くのはラブレターなどの場合で普通には用ふべきものでない所謂意味深長の手紙に用ふるものである。

に) 即ち四ツ折りにして、宛名のある方を上に、紙の端を封筒の表に向くやうに入れるのが正しい入れ方である。洋封筒に入れるのは書簡箋に限る(巻紙は洋封筒には入れない)のであるが、此の場合は封筒に合はして不體裁にならぬやうたゝんで(文字は内側)入れる。封筒は封じ目が右から左に向くやうに注意せなければならぬ。

(本書の三十三、四頁参照)

日附の書き方

いろいろの日附

手紙の日附は書き漏さないやうに必ず書いて出さねばならぬ、特にハガキには日附を書くのを忘れ易いから注意を要する。

ハガキの日附は裏の本文の終りに書いてもよく又表の切手の下方名前の上方に小さく書いてもよい。

書翰の日附は後日の證據となる。だから公用、商用その他職業上の手紙は勿論、一般儀式に關するもの招待案内状等には正式に年月日を書き入れる。作今商用上の手紙などには時間までも記入される場合がある。然し普通の私信には年號を書かずとも月日を正しく書けばよい。

『團内生活の近況を報ずる文』とか『艦内通信』『巡航』

日附の書き方

「便り」などには略式の日附を用ふるのも趣味的でよいものである。日附で間違の多いのは年賀状である。この事に就ては本書の年賀状の書き方の項に詳しく述べてあるから参照せられたい。

正式の日附

正式の日附は次のやうな書式に書くべきものである。

●昭和拾年八月九日

●七月六日

略式の日附

正式の日附は年月日を全部書くか或は月日を書くものである。略式の日附は趣味的に親し味とか懐し味とか柔か味とかを表現する爲に書く場合が多く之を大別すると、節日の

場合、現状を併記する場合の二通りに別つことが出来やう、例へば元旦、七草の日、春季皇霊祭の前日、端午の節句、土用の入、明治節の夜、新嘗祭の正午大正天皇祭の朝等は節日を表した場合の書き方であり、水無月五日夜九時浪の音を聞きつつ、八月十日水泳より歸りて、舷窓に射し込む月光に故郷に想を走せつ、九時半この手紙

略式の日附は、親しい間柄に往復する手紙に趣味的に書くものであるから其の書き方は、その人その人の頭腦の働きの如何やうにも書かれるものである。故に略式の日附はかやうに書くものであると決定するわけにはゆかぬ。只参考の爲に、略式の日附とはこんな風に書くものであるといふことを知る爲に次にこの例二三を書いてみることにする。略式の日附

●皇紀二千五百九十六年紀元節の朝

●天長節の午後

●窓外に晩春の麗かなる瀬戸内海の風景を眺めつゝ十五

日附の書き方

を書く、九月五日出港の
 一時間前、十月三日横須賀にて、など書くのは現状を併記した書き方である。而して之等略式の書き方は本文の終りに書くもので封筒の裏などには餘り書かないものである。但し幸便などに托して友達などに送るものには簡単な文句を書くのもよい、例へば、佐世保海兵團にて午後一時、等。

日附の書き方

日午後記す

- 八日土佐沖にてエンジンの音を聞きつゝ
- 立秋の日下宿の二階にて
- 明治節の佳節
- 師走十七日シン／＼と積る雪の音を聞き乍ら
- 三日午後十時釣床の下にて戦友の寢鼾を聞きつゝ
- 八月十日富士山頂にて
- 九月十三日揚子江上に異郷の月を眺め乍ら
- 十月一日母港へ向ひ航海中
- 五日佐伯灣にて

一般的の署名は上のものに對しても下の者に對しても差支ない。同輩や目下のものには姓だけで差支無いが而し長く手紙を出さなかつたところなどへは姓名全部を書いたがよい近親者は自分の姓は書かなくてもわかつてゐるし、書かない方が親しみがある。

署名

署名とは自分の名前を手紙に書くことで、その書き方は次のやうな區分に依る。

【一般的の署名】

○ 淺海島太郎 (氏名全部を書く)

【同輩や目下に對する署名】

○ 淺海、○ 淺海生、○ 淺海島太郎

【親近者に對する署名】(父母兄弟姉妹等)

○ 健太郎 ○ 健太郎生

署名

身分を併記するのは公
式の場合に限る、普通
の手紙には書かない。

宛名人のある場合に、
数人連署で出す手紙に
は身分の低いものより
先に書き、宛名の無い
場合（聲明書等）には
身分の高いものより順
次に名前を書く。

署名

【身分併記の署名】

○海軍一等水兵 深海鯛之助

【数人（連署）の署名】（宛名のある場合）

（最下位）（三水）濱田松夫

（二水）川田稻夫

（最高位）（一水）海野船男

第一分隊長殿

【数人（連署）の署名】（宛名の無い場合の特種な連署）

（最高位）海野船男

川田稻夫

夫婦や親子、兄弟等が
連署する場合は、宛名
のある場合でも無い場
合でも、男女長幼の順
に書くべきものである

署名

【夫婦、親子兄弟等の連署】

（最下位）濱田松夫

（夫）島田鶴夫
夫婦の連署順位

（妻）同 好子

（親）島田鶴藏
親子連署の順位

（子）同 鶴夫

（長男）島田洋太郎

（次男）同 洋次郎
兄弟連署の場合の順位

（三男）同 健三郎

宛名

海軍の公文書又は私文書等に閣下を用ふる場合は殆どない、之は官職氏名を併記するからで、一般に「殿」を用ふれば間違は無い。「殿」は上に用ひても下に用ひても儀式張つたときとか少し緊張した手紙にはよいものである。

宛名は先方の姓名又は姓或は名を書いて、それに敬稱をつけるものである。其の書きかたは、自分と相手方の身分關係によつてちがふものであるから以下各々の場合に於ける宛名の書き方及敬稱の用ひかたを記述する。

上官に對して書く宛名

敬稱は、「閣下」「殿」を用ひる。

閣下は、武官ならば將官、文官ならば勅任官あたりの

人に對し用ふるものである。例へば「大角海軍大將閣下」

「高橋海軍中將閣下」等

但し、官職氏名を具した書き方の場合は前記高官の人に對しても「殿」を用ひる。例へば「海軍大將財部彪殿」

「海軍中將米内光政殿」又は「吳海兵團長何某殿」等。

佐官及同相當官以下の方には「殿」を用ふ。例へば、

「森海軍大佐殿」「山田中尉殿」「佐藤一等兵曹殿」等

と書くのである。

部内相互の手紙には海軍を略してしまふことが多い。例へば、佐藤大尉殿、後藤少尉殿などと書く、又下士官兵で懇意の間柄のものは北川一曹殿、南山二機曹殿、東田一水殿、西村一空兵殿などと書いて海軍一等兵曹、海軍一等水兵、一等航空兵などと全部書かない場合が多い、之は海軍獨特の書き方で部内では總てのことを簡易化し

て用ふる慣習からきたものであらう。即ち馬鹿町噂なやゝこしいことを書いてゐては間に合はねことが多いからである。

自分の近親者即ち弟や妹、妻などには姓は書かず名のみを書くのが普通であるが姓名全部を書いても間違ひといふわけではない。封筒の表書きやハガキの

同輩に對して書く宛名

同輩には「様」「君」「兄」「大兄」等の敬稱を用ふ。例へば、「山中鹿藏様」「中田君」「阿部五郎兄」或は「加藤大兄」等の如く。

目下に對して書く宛名

目下のものには「様」「殿」「どの」を用ひる。「様」は一般に用ひられ、「殿」は下のものにも上のものにも用ひられる場合があり、「どの」は目下の女性に

對してのみ用ひられる。例へば

松本敬一様（一般）

武夫殿（弟）

花子どの（妻、妹、下婢等）

弟や妻、妹、下婢等に對しては名だけ書くのが普通である。（但し表書きには必ず氏名を書かねばならぬ。）

師長に對して書く宛名

師長といつても相手方の職業に依つて種々書き方があるが、教師、醫師、辯護士、文士等には「先生」の敬稱を

表書きには如何なる場合にも姓名全部を書くべきである。

「禪師」の敬稱は禪宗の僧侶のみに用ひ、「上人」「和尚」等は一般宗旨の僧侶に用ひられてゐるやうである。

だから眞宗の僧侶などに禪師の敬稱を用ひたりするとおかしなものになる。

宛名

用ひ、僧侶に對しては「和尚」「禪師」「上人」等を用ひる。例へば「大町桂月先生」「雲井卓吉先生」「法如和尚」「月照上人」等。

五〇

團體に對して書く宛名 (業務用)

「殿」を用ひても差支へ無いが此の場合は「御中」を用ふる方がよい。「日本銀行御中」又は「級進社御中」等の如くに書く。

先方の附隨者に對して書く宛名

高官に宛てた手紙を其の附隨者に出す場合に部内では「殿」を用ふることが多い、例へば長官宛の願書を其の附隨者たる副官に出す場合等に「××鎮守府副官殿」としたり。元帥などの高官の方に差出す場合に「××元帥副官殿」等とする。

先方が高貴の方であつて直接手紙を出すのは恐多いといふやうな場合には其の附隨する人に對して出すものである。此の場合同じくその附隨者の氏名が確實にわからぬことが多いものであるから其の役柄を書いて「御中」とする例へば、「東郷侯爵家家扶御中」の如くに。

連名に對して書く宛名

順序を定め難い連名宛に書く場合は隨意に對手方の「氏名殿」を書

對手方が多人數の場合、即ち一本の手紙を連名宛にする場合は次のやうな順序に書くものである。

(最上位) 深海鯛之助殿 (一曹)

宛名

五一

いて、終りの行に「次第不序、御高免被下度候」等と書き添へてをく。

- 深海島太郎殿（二曹）
- 鳥島立三郎殿（一水）
- 東 洋太郎殿（二機）
- （最下位）西 英五郎殿（三水）

艦船乗員、分隊員に對して書く宛名

船艦乗員宛の手紙には乗員御一同様でも乗組員御一同様でも差支へない。各位を用ふるときは御一同を書かない

此の場合は「様」を用ふるが妥當である、例へば「軍艦最上乘員御一同様」「第十六分隊員御一同様」等又「各位」を用ひてもよい。此の際は「××乗員各位」と書くのである。

脇付の書き方

手紙に脇付を書くのは必要に應じて書くのであつて、なんでもかんでも脇付を書かなければならないといふものではない、此の脇付の意味をよく知つてゐないと目下の者にでも親しい友人の間柄でも必ず脇付を書くものだといふやうな勘違いをする。目下のものや同輩で親しい間柄では脇付を書かない方がよい場合がある。例へば大西

脇付は傍書など、いつて二た通りある。一は書中に書くもので、先方に對し直接宛てるのは失禮だといふので「御身邊に」「御机の傍まで」との意味で宛名の傍へ書き添へるもの、一は封筒に書くもので「直接披いて下さる」とか「返事が要ります」とか「返信であります」とか「急を要するものであります」とか「いふ意味の文句を書き添へるものである、だから此の両方に脇付を書く場合は封筒の脇付と書中の脇付と矛盾した文句を書かな

君、机下なんて書くとは變な感じがする。

「麾下」はおもに軍人に用ふ。「閣下」は武官なれば將官、文官なれば勤任官あたりに用ふべきものである。

同輩中でも極く親しい間柄には脇付を用ひる必要もないが、さうでない人には脇付を用ひた方がよいだらう。女子に用ふる脇付は禮儀上の点より一種の體裁さか、感じをつくる爲に用ひられることが多いやうである。實際女子様と書きツばなすよりは、女子様御許へと書いた方が感じがよい。

脇附の書き方

いやうに注意せなければならぬ。封筒に『親展』と書いて書中に『侍史』と書くやうなのは外面には本人に見よといひ乍ら中には御傍付の人に渡すと云ふ意となつて矛盾するから、こんなことを書かないやうにせなければならぬ。

書中宛名の脇に書くもの

【高貴な人(上官)には】

閣下、臺下、麾下、尊下、尊前

【高貴の附隨者に宛てる場合】

執事御中、家扶御中、御取次御中

【目上には】

貴下、玉机下、玉案下、侍史、侍曹、丞丈、簾下

【同輩には】

机下、案下、机右、座右、座下、硯北、梧下、研北、足下

【女子には】

御前に、御許へ、御あたりに、まゐる、まゐらす、御文机の下に

【父母には】

脇附の書き方

脇付は一般に誰でも知
つてゐるものをなるべく
用ひた方がよい。た
とへ意味は徹底してゐ
てもそれが先方で全く
何のことやらわからぬ
やうなむづかしいもの
は用ひないやうにする
がよい。

脇付の書き方

膝下、御前に

【僧侶には】

猊下、權下、蓮下

【教師には】

丞丈、侍史

【文墨の人には】

大雅

【団体には】

御中

【連名の場合には】

各位

封筒に書くもの

【普通の場合には】

常用、當用、平信、平安、無事

【他見を憚る場合には】

親展、直被、直閱、御直被、親剪、親覽

【急用の場合は】

至急、大至急、急用、急紙

【注意を要する場合は】

脇付の書き方

普通の手紙は餘程丁寧
な机帳面な人でないと
封筒の脇付は書かない
やうである。
他見を憚る場合封筒に
親展とか直被とか書い
た場合は書中に脇付を
書かない方が間違ひが
少ない。

幸便には切手をはらな
いで人にことづけるも
のであるから「幸便」
「托公用使」「托吉川
君」「托定期」等の文
字は普通切手を貼るべ
き付近に書いた方がよ
い、朱書すれば猶よい

要用、公務用、願用、御禮、弔詞、注文の件、問合せ

【人に託する場合】

幸便、○○君に託す、託○○君、託公用使、託定期

【返事を求むる場合】

乞貴答、乞貴報、待貴答

【返信の場合】

返信、貴答、奉答、御返事、拜答、拜酬、貴酬、奉復

【高貴に對する場合】

執事御中、家扶御中、家從御中、御取次御中

【封中に他物のある場合】

願書在中、届書在中、別封在中、注文書在中
請求書在中、爲替在中

自他の呼稱

自分の卑稱 (みづからいふとき)

【父】 父、自分

【母】 母、私

【両親併稱】 父母、両親

【祖父母】 祖父、祖母、自分

自他の呼稱

官廳へ送る願書や届書
報告書等は、其の在中
を封筒に朱書して置く
と先方でそれらの掛
りへ直ぐ廻すことが出
來早く處理できる。

父母の兄を伯父といひ
父母の姉を伯母といひ
父母の弟を叔父といひ
父母の妹を叔母といふ
のである。

上官から下官へ、下官

から上官への手紙でも
職掌以外の私信の場合
は本官とか本職とか卑
職とかの語は用ひない
ものである。

自他の呼稱

- 【伯叔父母】 || 伯父、伯母、叔父、叔母、自分
- 【夫】 || 自分、余
- 【妻】 || 私、わたし
- 【子】 || 私、兒、小子、豚兒、名(何某)
- 【兄】 || 兄、自分
- 【姉】 || 姉、私
- 【弟妹】 || 私、小弟、小姉、名(何某)
- 【師】 || 余、自分
- 【弟子】 || 私、小子、小弟、小生
- 【上官】 || 本官、本職

- 【下官】 || 小官、下官、卑職
- 【自分】 || 私、吾、己、余、僕、小生、小子、小人、小弟、不肖、不才、拙子、拙者、拙生、迂生、野生、愚生、迂拙、老拙、自分、自己、余輩、吾輩、吾人、野拙
- 【友人併稱】 || 僕等、吾等、余等、俺等、私共
- 【親族】 || 親屬、親戚、親類、一家、賤累、屬類
門葉、連葉、家族
- 【家族併稱】 || 一同、一統、各自、家内中、皆々

自他の呼稱

老父、老母は歳寄りたる父母にのみいふことばで四十や五十までの父母を指して老父母といふのは似合はない。亡の字は死んでなくなつた人の場合にのみ用ひるものである。たとへば行方不明になつてゐるやうな場合でも亡祖父などとはいはない。

自分方に屬する人達の卑稱

(自分の方を人に對していふとき)

- 【父】 父、家父、老父、乃父、野父、亡父(死んだ父)
- 【母】 母、家母、老母、私母、亡母(死んだ母)
- 【両親併稱】 父母、両親
- 【祖父母】 祖父、祖母、祖老嫗
- 亡祖父、亡祖母、亡祖父母(死んだ祖父母)
- 【伯叔父母】 伯父、伯母、叔父、叔母
- 【甥姪】 甥、愚甥、小甥、姪、愚姪
- 【夫】 我夫、主人、夫、宅

自分の兄弟姉妹の子、男であれば甥であり、女であれば姪である。自分の妻の兄弟姉妹の子、或は夫の兄弟姉妹の子も甥姪といつて差支へない。

相手の尊稱

(相對していふとき)

- 【妻】 妻、家内、荆妻、賤荆、愚妻
- 【男の子】 忝、長男、次男、末子、愚童、豚兒、子供
- 【女の子】 長女、娘、拙女、次女、三女
- 【孫】 拙孫、愚孫、孫
- 【兄】 吾兄、我兄、舍兄、家兄、拙兄、愚兄
- 【姉】 愚姉、家姉、私姉
- 【弟】 弟、舍弟、家弟、愚弟、拙弟、小弟、私弟
- 【妹】 愚妹、拙妹、家妹、私妹、小妹、妹

自他の呼稱

- 【父】 〓 父上様、御父上様、御父君様
- 【母】 〓 母上様、御母上様、御母君様
- 【両親併稱】 〓 御両親様、御双親様、御二方様
- 【祖父母】 〓 御祖父様、御祖母様、御祖父母様
- 【伯叔父母】 〓 御伯父様、御伯母様、御叔父様、御叔母様
- 【夫】 〓 御前様、旦那様、貴方様、あなたさま
- 【妻】 〓 御前、御許、御身、和女、そなた
- 【子】 〓 其許、其方
- 【兄】 〓 兄上様、御兄上様、兄君、兄上

繪書きには「畫伯」といふ尊稱を用ひられてゐるが、相對していふときはやはり「先生」等と呼ばれてゐる。

「貴老」などは先方が餘程老人でない限り用ひない方がよい。人間といふもの妙なもので歳をとるととる程若返りたいたいもので人が歳寄り扱ひにすると憤慨するやうな人が中にはある。

自他の呼稱

- 【姉】 〓 姉上様、御姉上様、姉君、姉上
- 【弟妹】 〓 其許、御身
- 【上官】 〓 貴官、貴職、貴下、閣下
- 【下官】 〓 貴下、貴職
- 【師】 〓 御師、大人、先生
- 【弟子】 〓 御身、諸子
- 【高貴の人】 〓 大人、閣下、臺下
- 【文の友】 〓 詞兄、詞長、雅丈、雅仗、雅兄、文契
- 【普通の相手】 〓 貴君、貴兄、貴所、貴殿、貴丈、貴下、貴老、賢兄、尊下、尊公、足下、大兄、尊兄

【友人併稱】 諸賢、諸君、御身等、公等、貴公等、

君達

【親族】 御一族、御血筋、御近親、御親戚、御家門

【家族併稱】 御一同、御一統、御一家、御家族、

御全家、皆々様、皆様、各々様、各位

相手方に屬する人達の尊稱 (相手方のをいふ)

【父】 尊父、尊君、尊翁、令父、嚴父、賢父、御父上

御親父、御父君

【母】 母君、母上、母堂、賢母、令母、御母堂、

御母君、御母公、御刀自、御母上

【両親併稱】 御両親、御双親、御雙堂、御二方

【祖父母】 御祖父様、御祖母様、御祖父母様

【伯叔父母】 御伯父様、御伯母様、御叔父様、

御叔母様

【甥、姪】 令甥、令姪

【夫】 令夫、令配、尊夫、御良人

【妻】 令荆、令堂、令閨、令室、夫人、令夫人、奥様

【男の子】 令息、令子、愛息、賢息、御子息、御子達

【女の子】 令嬢、令媛、愛嬢、御息女、御愛女、御娘子

【孫】 〓 大孫、令孫、鳳孫、御孫、貴孫

【兄】 〓 令兄、大兄、仁兄、長兄、賢兄、貴兄、尊兄

【姉】 〓 令姉、貴姉、大姉、尊姉、姉上、姉君

御姉上様

【弟】 〓 令弟、貴弟、尊弟、御弟、賢弟、御舍弟

【妹】 〓 令妹、尊妹、貴妹、妹君、御妹、御妹御

【弟子】 〓 御門弟、御弟子、御門下

自他住地の呼稱

【自分の住地を人にいふとき】

「邑」は「むら」である。

弊社、弊堂、弊舗等は商店や會社などに用ひる。

【人の住地を對していふとき】

當所、當方、當地、當村、當町、當縣、本村、小村
本町、本郡、本縣、本府、寒村、山郷、鄙地、弊地
弊郷、當縣下、當郡内、當村内、當区内

貴地、貴里、貴郷、貴村、貴市、貴縣、貴府、御地
尊地、尊邑、錦地、錦港、華地、華邑、御村、御町内

自他住居の呼稱

【自分の住居を人にいふとき】

拙宅、茅屋、陋屋、弊屋、弊宅、弊舎、弊堂、弊社

自他の呼稱

自他の呼稱

七〇

茅堂、茅舎、拙家、拙屋、小宅、小屋、小居、私宅

【其の人の住居を對していふとき】

貴店、貴社、貴肆、貴舖、貴館、貴堂等は商店會社などに對して用ひる。

貴宅、貴家、貴邸、貴堂、貴館、貴屋、貴閣、貴宇
高堂、高樓、玉家、尊家、尊宅、尊邸、尊堂、御邸
御宅、御屋、『貴店、貴社、貴肆、貴舖』（商店）

自他手紙の呼稱

【自分方の手紙をいふとき】

卑書、卑翰、一簡、一筆、一書、書面、書狀、書簡
手紙、拙墨、拙章、寸簡、寸楮、片楮、愚翰、寸書

寸楮、寸簡、片楮等はハガキ文又は極く短い手紙などの意である。

【相手方の手紙をいふとき】

貴書、貴狀、貴封、貴簡、貴墨、玉翰、玉章、玉書
玉札、尊書、尊翰、尊墨、華墨、華筆、芳墨、芳書
御狀、御文、御書面、御手紙、御書芳、芳牘



自他の呼稱

七一

口語文は日常に用ひてゐる言葉であるから「ます」「ませう」「ますが」「ませぬ」こんな文句の意味は誰でもわかるけれど、候文になると「候」「べく候」「候處」「候はず」などと一寸判りにくい。又用ひ方によつて往々意味をとり違へることがある。といふのは「候」といふ字は同じ意味に用ひられるものでなく、其の場合

口語文と候文の對照

【ます】の付く言葉

ます……………候。

致します……………致候。

仕ります……………仕候。

願ひます……………願候。

願ひます……………願上候。御願申上候。

右同(一層丁寧)願上奉り候。

場合の文の前後の關係で様々に變化するものである。そこで此の口語文と候文の對照字句を下記に載せて諸士の參考にした次第である

「候」は、ます、ました、いづれの場合にも用ひる。

「思ひ候」「存じ候」は同じ意味で、何れも思つてゐる、ことである。

「致候」と「仕候」は

差上さしあげます……………差上さしあげ候。

差上さしあげたらうございます……………差上さしあげ度候。

申もうします、云いひます……………申もう候。

申上もうしあげます……………申上もうしあげ候。

申もうして居をられます……………申もうし居をられ候。

思おもはれます……………思おもはれ候。

思おもつてゐます……………思おもひ居をり候。

思おもひます……………思おもひ候。存ぞんじ候。

存ぞんじてゐます……………存ぞんじ居をり候。

存ぞんじます……………存ぞんじ候。存ぞんじ奉たてまつり候。

同じ意味であるが仕候の方が丁寧な云ひかたでは目上に對して用ひる。

「居り候」「罷り在り候」は何れも、居ります、といふ意味ではあるが「居り候」の方は一般に用ひ「罷り在り候」はかたぐるしい儀式張つた文によく用ひられる。すなはち、「勉強致居候」「服務在罷候」など。

存ぞんせられます……………存ぞんせられ候。

あります……………有これあり之候。

お伺うかがひします……………御伺おんうかがひいたし致候。御伺おんうかがひつかまつり仕候。

まいります、行ゆきます……………參上さんじやう致候。參上つかまつり仕候。

居をります……………居をり候。在まかりあり罷候。

……………御座候。

考かんがへてゐます……………考かんがをへ居り候、考かんがへをり居候。

信しんじます……………信しんじ候。

都合つごうできかねます……………都合つごうで出來兼候。

【ますか】の付く言葉

ますか……………候さふらうや。候さふらう哉。

……………有これあり之候哉。これ有ありり候や。

……………にて候さふらうや。

……………被下くだされ候さふらうや。

……………御座候ござや。

……………左様さようにて候や。

【ますが】の付く言葉

……………候處さうらうどころ。候も。候が。

「候處」は、ますが、

ましたが、兩者何れの場合にも用ひられる。

ある、ない、の文句には、候文では「之」の字を入れる「無之」

「有之」等の如く。無之、有之、乍憚、在罷、被下、被成、可成、可被下、可申、可致、可仕、などは漢文式にしたから上にかへつて讀むのである。若し之をかへつてよまないやうに書く場合は、

思案中しあんちゆうでございませうが……思案中しあんちゆうに御座候處ござさうらうごころ。承知しょうちしてゐますが……存じ居り候もぞんを。案あんじてゐますが……案あんじ居り候がを。心配しんぱいでございませうが……心配しんぱいに御座候もござ。意外いぐわいでありますが……意外いぐわいに有之候もこれあり。

【ますから】の付く言葉

ますから……候つきに付。候まゝ。候間あひだ。候故ゆえ。思おもはれますから……思おもはれ候をに付。存ぞんせられ候故。信しんじますから……信しんじ候まゝ。

をくり假名をつけるのが正しい。例へば「可申候」でも「申す可く候」と書くのである。

「候へば」は「したなれば」の場合にも用ひる。「候はゞ」は「したならば」の場合にも用ひる。

察さつせられますから……察さつせられ候間あひだ。参上さんじやういたしますから……参上さんじやう仕候間あひだ。

【ますけれども】の付く言葉

ますけれども……候へども。候得共へきども。候へども。存ぞんじますけれども……存ぞんじ候へ共ごども。ありますけれども……有之候得共これありさふらへきども。

【ますれば】の付く言葉

ますれば……候へば。ございませうば……御座候へば。

進級しんきゅうしますれば……………進級致候しんきゅういたしへば。進級仕候しんきゅうへば

【ますならば】の付く言葉

ますならば……………候さうらはゞ。

ございますならば……………御座候ござはゞ。

ありますならば……………有之候これありはゞ。

(ありませぬならば)……………無之候これなくはゞ。

【ますまい】の付く言葉

ますまい……………まじく候さうらう。

入港致にうかういたしますまい……………入港致にうかういたす間敷候まじく。

「間敷候」はその用ひ
どころによりて、ます
まい、ますな、の兩者
何れの場合にも用ひら
れる。

出港しゆつかうしますまい……………出港致しゆつかういたすまじく候。

【ますな】の付く言葉

下さくだいますな……………下さくだるまじく候。

御心配ごしんはい下さくだいますな……………御心配被下間敷候ごしんはいくだされまじく。

なさいますな……………被成間敷候なされまじく。

【ました】の付く言葉

ました……………候さうらう。候さうらひき。

いたしました……………致候いたし。仕候つかまつり。致候いたしひき。

なりました……………相成候あいなりさうらう。

「候か」「候も」は、
ましたが、さすが、の
何れの場合にも用ひら
れるが「候ひしも」は
ましたが、の場合に限
る。

ありました……………これあり有之候。これありさふら有之候ひき。
申しました(云ひました)……………もうし申候。もうしさふら申候ひき。

【ましたが】の付く言葉

ましたが……………さふらうごころ候が。候も。さふらうごころ候處。候ひしも
しんはい心配いたしてゐましたが……………しんはいいたしをりさふら心配致居候ひしも。
ちん案じてゐましたが……………あん案じ居り候が。
くだ下さいましたが……………くだされさふらうごころ被下候處。下され候も。
しゆつかうよてい出港豫定でありましたが……………しゆつかうよてい出港豫定に有之候處。

【ましたか】の付く言葉

ましたか……………さうらう候や。
しんきう進級申渡がありましたか……………しんきうもうしたしこれありさふらう進級申渡有之候や。
げしゆく下宿へ行かれましたか……………げしゆく下宿へ行かれ候や。
しけん試験がございましたか……………しけんござさふらう試験御座候や。
けんえつ検閲は終了しましたか……………けんえつしゆりよういたしさふらう検閲終了致候や。

【ましたけれども】の付く言葉

ましたけれども……………さふら候へども。候へご。候得共。
ぞん存じましたけれども……………ぞん存じ候へども。
ききよう歸郷しましたけれども……………ききようつかまつりさふらうへご歸郷仕候得共。
じつかう實行しましたけれども……………じつかういたしさふらう實行致候へご。

「候得共」「候へど」
は、ましたけれども、
ますけれども、何れに
も用ひられる。

【ましたから】の付く言葉

「候故」「候間」は、
ましたから、ますから
何れの場合にも用ひ
られる。

ましたから……………さふらうゆえ 候故。 さふらうあひだ 候間。 さふらう 候に付。

進級しんきゅうしましたから……………しんきゅういたしさふらうゆえ 進級致候故。

乗艦じようかんしましたから……………じようかんつかまつりさふらうあひだ 乗艦仕候間。 || 致候間

入校にうかうしましたから……………にうかうつかまつりさふらうつき 入校仕候に付。 || 致候間

【ましたさうて】の付く言葉

ましたさうて……………さふらうよし 候由。 さふらうおもひき 候趣。

水校すいかうへ轉勤てんきんされましたさうて……………すいらいがくかう 水雷學校へ轉勤被成候由
一等水兵いちとうすいへいになりましたさうて……………いちとうすいへい 一等水兵に相成候趣。

遊あそばされたさうて……………あそはされさふらうよし 被遊候由。

ましたわけ……………さふらうじね 候旨。

ましたとのこと……………さふらう 候との事。 候との御事。おんこと

なされましたとのこと……………なされさふらう 被成候との御事。おんこと

ますので……………さふらうじよう 候條。

【ませう】の付く言葉

ませう……………まを べく候。 可く候。

申しませう……………まを 申すべく候。 可申候。

「候條」は一般の手紙
には餘り用ひない。お
もに公用文に用ひられ
る。

なりませう、とか、な
ります、の文句には
「相」の字を入れて、
「可相成候」「相成候」
と書く。

なりませう……………可相成候。相成る可く候。
申上ませう……………申上ぐ可く候。可申上候。
致しませう……………可致候。可仕候。
ありませう……………これ有るべく候。可有之候。

でせう……………候はん。

有るでせう……………有之候はん。

ございませう……………御座候はん。

【ませうか】の付く言葉

ませうか……………べく候や。

「候や」は、ましたか
ませうか、ますか、何
れの場合にも用ひる。

申しませうか……………申すべく候や。可申候哉。

致しませうか……………可致候哉。可仕候や。

ございませうか……………御座候や。

有ませうか……………有之候や。

【させませう】の付く言葉

させませう……………さすべく候。

お送り致させませう……………御送り致さすべく候。

持参いたさせませう……………持参致さすべく候。

させます……………しむべく候。

實行じつかうさせます……………實行じつかうせしむべく候。

【ませうとも】の付く言葉

ませうとも……………候さくらちとも。

なさいませうとも……………被なされさくらちとも成候共。

なりませうとも……………相あいな成候とも。

【下さいませ】の付く言葉

下さいませ、下さり……………被くだされたく下度候。

送おくつて下さいませ……………御おんちく送り被くだされたく下度候。

安心あんしんして下さい……………御ごあんしん安心被ごあんしん下度候。

教おしへて下さい……………御ごきようじ教示被ごきようじ下度候。

【ませぬ(ん)】の付く言葉

ませぬ……………候さくらはず。

申しませぬ……………申まをさず候。不まをさず申候。

ありません……………無これなく之候。

ございませぬ……………御ござ座なく候。

いたしませぬ……………不いたさず致候。不つかまつらす仕候。

覚えませぬ……………覺おほえ申まをさず候。

少しも知りませぬ……………少すこしも存ぞんじ申まをさず候。

下さいませ、下さい、何れの場合でも「被下度候」である。

ませぬ、も、ませんも同じ意味である。

用事はありますせん……用事は候はず。用事無之候。

【ませぬ(ん)か】の付く言葉

ませぬか……まじく候や。間敷候哉。

ませぬか……候はずや。

ありませんか……無之候や。

ございませんか……御座なく候や。

行く筈ではありませんか……行く筈に候はずや。

ませぬか、も、ませんか、も同じ意味である

候文句章の用ひ方

上輩に對する場合 同輩に對する場合 下輩に對する場合

申上げ奉り候 申上げ候。申上候 申進候。申入候

謹みて御願申上候 御願申上候 頼み入れ候

恐れ乍ら御案じ下 御案じ被下間敷候 御案被下間敷候

さる間敷候 御安心下され度候 安心せられ度候

憚り乍ら御安心下 され度候

貴覽に供へ奉り候 御目にかけて候 差上げ候

貴覽に供へ…あなたに見ていたどくやう差上げます。

御案じ下さる間敷候…案じて下さいますな

候文句章の用ひ方

候文句章の用ひ方

目出度存じ奉り候

目出度存候

めでたく候

御覽被遊度候

御覽被成度候

見られ度候

謹みて拜見仕り候

拜見致し候

披見致し候

御枉駕被下度候

御入來被下度候

來られ度候

拜趨可仕候

參上可致候

參るべく候

私は一向存じ申さ

小生更に承知致さ

余は少も知らず候

ず候

ず候

恐入候得共御序の

御序の節御伯父様

序の節御伯父様へ

節御伯父上様へ宜

へ宜敷御傳へ被下

宜敷傳へくれられ

敷御鳳聲被下度希

度願上候

度候

枉駕||かごをまげるこ
と、人の來臨をいふ敬
稱、來て下さいといふ
意。
拜趨||參上すること。
鳳聲||音聲の敬稱であ
つて、宜敷御鳳聲被下
度候は、よろしく申し
て下さいといふ意。

恐縮||恐れ入る。
懇情||ねんごろなるな
さけ。
筆紙に盡し難く候||手
紙には書き盡せない。

ひ上げ奉り候

殊に御賢弟様御遺

殊に賢弟御遣し下

殊に御弟遣し呉

し被下 恐縮の至

され有難く御懇情

れられ有難く厚く

り淺からぬ御懇情

謝するに詞なく候

御禮申上候

の程御禮筆紙に盡

し難く候

昨夜御無事にて

昨夜御無事にて

昨夜御無事にて

御歸宅遊ばされ候

御歸宅の由めでた

御歸宅の由めでた

由めでたく賀し奉

く存じ候

う候

り候

候文句章の用ひ方

起筆の挨拶用語

起筆の挨拶とは、即ち手紙の書き始めの挨拶のこと、人に逢へば「今日は」とか、また他家を訪問したときに「御免下さい」と挨拶すると同様なもので、手紙に是非書かねばならぬ挨拶のことばである。

この起筆の挨拶用語はその手紙の種類に依つていろ／＼書き方があつて、之を大別すると、「發信の用語」「返信

發信の用語

- 拜啓 ○拜白 ○拜呈 ○謹啓 ○謹白 ○捧呈 ○奉呈 ○啓上
- 啓呈 ○敬啓 ○肅啓 ○肅呈 ○恭敬 ○奉啓 ○一筆啓上仕候
- 一札拜呈仕候 ○一筆申上候 ○一翰啓上仕候 ○謹啓仕候
- 愚翰肅呈 ○片簡肅白 ○愚翰進呈 ○一書謹呈 ○寸楮奉呈
- 一書申入候 ○愚札拜呈仕候 ○恭しく一書拜呈仕候

の用語」「初信の用語」「再信の用語」「急信の用語」等に分つことが出来、これ等の用語を省略するときには、「前略の場合に用ふることば」がある。だから起筆の挨拶は手紙の種類及相手方と自分との關係等によつて其の用語を選定せなければならぬ。候文と口語文によつて起筆の挨拶用語を異にせなければならぬ場合

- 一寸申上候 ○以書中申上候 ○短文御高免可被下候
- 手紙を以て申上候 ○幸便に托して一書拜呈仕候
- 虔みて敬上仕候 ○手紙にて申上候 ○葉書にて申入れ候
- 乍略儀葉書を以て申上候 ○略乍ら書面を以て申上ます
- 謹みて申上ます ○手紙で申上ます ○失禮乍ら葉書にて申上ます ○幸便に托して申上ます

返信の用語

- 拜復 ○後啓 ○拜答 ○謹復 ○啓復 ○御細書委く拜見仕候
- 何々港よりの御便り有難く拜見致候 ○御書面拜讀仕候

と、兩者兼用できるものとあるから間違はないやうにせねばならぬ

起筆の挨拶用語

九四

- 御手紙拜誦仕候 ○御懇書難有拜見仕候 ○尊翰拜見仕候
- 御書狀披見致候 ○何々君に御托送の一封正に拜讀仕候
- 御文懐かしく拜見仕候 ○一寸御返事申上候 ○何月何日
- 附御書面正に拜受仕候 ○御懇篤なる御書面を載き恐入候
- 貴翰今朝相届候 ○御手紙詳細拜讀仕候 ○御手紙有難う
- 取あねず御返事申上ます ○御手紙拜見いたしました。
- 早速御通知下され恐れ入りました。

初信の用語

- 唐突乍ら貴意を得申候 ○未だ貴意を得ず候得共申進候

- 甚だ突然乍ら ○未だ拜眉を得ず候得共一書拜呈仕候
- 乍突然卑翰拜呈仕候 ○未だ拜眉の榮を得ざれ共 ○一面識も無い私から突然御手紙を差上る無禮を御許し下さい

再信の用語

- 再啓 ○重ねて申上候 ○前便御高覧の事と存候。
- 何月何日附の拙書御披見下され候事と存候。
- 何月何日の書面すでに御高覧下され候事と存候。
- 何月何日附の手紙は御覧下さつたこと、存じますが。

再信は、手紙を出した
が返信が来ない場合と
か、一信に書き漏らし
たことを書くとか、或
は一信發送後一信の内
容事態に變化を生じた
場合などに出すもので
あるから、之は再信で
あるといふことを先方

起筆の挨拶用語

九五

に通ずる必要がある。即ち前に出した手紙に關連したるものであることをその起筆の挨拶に書くのである。

急信の用語

- 急啓きふけい○至急貴意しきつきいを得申候えまをし○急便きゆうびんを以て申上候もつ。
- 取急とりいそぎ拜呈はいてい仕候はいてい○草々そうそう申進まへめ候まへ○走書はしりがき御免被下度候ごめんくだされたく。
- 突然とつぜん乍ら取急とりいそ御願ごねがひ申上まへますまへ○早速さつそくですが申入まへれます。
- 取急とりいそぎ申上まへますまへ○早速さつそく乍ら御願ごねがひ申上まへます。

前略の用語

- 前略ぜんりやく○冠省くわんせい○啓略けいりやく○上略じやうりやく○前略御免ぜんりやくごめん○略呈りやくてい○前文省略ぜんぶんせうりやく。
- 前文御免被下度候ぜんぶんごめんくだされたく○前略御仁免被下度候ぜんりやくごじんめんくだされたく。

○前文御免下さい○早速乍ら申上まへます。

時候の挨拶用語

一月の用語

- 正月せうがつ○睦月むつき○嚴寒げんかんの候こう○酷寒こくかんの候こう○大寒たいかんの候こう○烈寒れつかんの候こう○甚寒じんかんの候こう○寒威かんい凛烈りんれつの候こう○寒氣かんき堪たへ難がたく候處こうじよ○寒氣かんき凌しのぎ難がたく候處こうじよ○逐日ちよく寒氣かんき相募あひつり候折柄をりから○雪後せつご一層いちじやう凌兼しのぎかね候こう。
- 寒氣かんきいよよく嚴きびしく○當年たうねんの寒氣かんき一際きはみ身に泌しみみ申候まをし。

時候の挨拶は、人が出會つたとき「どふも殿しい暑さでございます」とか「大變涼しくなりました」などと挨拶を交すと同じである。故に其の時候或は其の心持にびつたり合ふやうな用語を用ひなければならぬ。下欄に一月から十二月まで及び季節外の用語

を其の時候時候に應じて書いてをいたが、之は内地一般の氣候を標準にしたものであるから、所に依つては一月でも三月頃の時候の處もあり十月でも十一月末頃の氣候もあるといふ風に多少異つた時候の土地もあるから、これ等の地にあるものは各々多少の斟酌して書いたがよい。例へば大湊方面の警備にあるものと馬公警備の船艦に

在るものとは其處に時候の相違があり。佐世保では「櫻花満開の候に御座候處」と云ふべき時候でも横須賀へ行けば「未だ櫻の蕾も堅く朝夕うすら寒く御座候處」等と云はなければならぬ場合があるかも知れないから一月はから書く二月はこの時候用語を書かねばならぬと断定し兼ねるのである。

時候の挨拶用語

○入寒以來格別に凌ぎかね候○雪が降つて寒さが一層厳しくなりました○ひどい寒さですが○一方ならぬ寒さですが○馬鹿に今年には寒いですが○今年には例年よりは暖か

二月の用語

○如月○晩冬の候○春寒の候○寒風漸減の候○解氷の候○餘寒の砌○春寒なほ強く候處○殘寒殊のほか厳しく。○餘寒堪へ難き候折柄○餘寒なか／＼に厳しく○春寒凌ぎ難く候處○寒威猶烈しく候處○寒氣烈しくも艦隊は出

動の時期と相成候處○餘寒の中に梅花清香を放つ頃と相成申候○立春の聲にどこやら春めくやうになりました。○春とは名のみで寒さは一層厳しいやうです。

三月の用語

○彌生○早春の候○春寒稍緩み候○梅花馥郁の候○輕暖の候○追々春暖相催し候○春寒き時候○春色俄に相催候○稍春景色と相成候○孟春の候○追々長閑に相成候處。○一雨毎に春らしうなつてまいりました○一兩日來何となく春らしくなりました○輕暖の候とも申すべき今日此

時候の挨拶用語

公用文の手紙などは要件を主としたものであるからあまりくどくしい時候の挨拶などをせずに、アツサリと「酷暑の候」とか「秋冷の候」程度のもを用ひたがよい。

上陸毎に顔見合せる間柄とか、寄港地毎に手紙を出してゐる内地巡航通信の第二信以後の手紙とかいふものには時候の挨拶や、安否の

挨拶など一書く必要の無い場合が多いからこういふ際は簡略しても差支へない。

頃となりました○天地何れも春めいて長閑な頃となりました○寒暖不同の季節でございますが。

四月の用語

- 卯月○春和の候○春暖の候○春色充分の候○風日麗和の研○風日清和の候○櫻花爛漫の好季節○長閑の時候○花紅柳緑の好季節○春色と、のひ候折柄○柳櫻の候と相成申候○春色正に 酩の候と相成申候○春も半ばを過ぎ申候○春光人を腦す候に御座候處○春風颯蕩の候○よい時候になりました○草木の芽もやうやく萌へ初の

ました○心地よい春暖の折柄○花盛りの折柄。

五月の用語

- 皐月○晩春の候○暮春の候○更衣の候○老春の砌り。○酷暑の候○向暑の候○薄暑の候○輕暑の候○風日清美の砌○薰風綠樹の候○鶯去鵲來の節○葉櫻の候と相成候○目に青葉山ほととぎす初鯉は正に此の頃のことに候。○新緑の香なつかしき頃と相成申候○一雨毎に木々は青葉になりまさり候○牡丹の花盛りと相成候○青葉の蔭なつかしき頃となりました○暑からず寒からず誠に暮しよ

い頃となりました。

六月の用語

○水無月○初夏の候○新緑の候○若葉の候○首夏の候。
 ○梅雨の候○農家多事の頃○桐の花咲く頃○麦秀の砌。
 ○連日の梅雨惱ましく候折柄○逐日暑氣相加り申候。
 ○暑氣俄に相加り申候○吹く風も夏めき申候處○梅雨晴の天氣まことに暑苦しく候○田植の唄なつかしき頃と相成申候○日毎に暑さが増して來ました○若葉の影も爽になりました○見渡す限り夏景色になつてまゐりました

七月の用語

我海軍では例年七月下旬から夏季休暇が許される、故に御互同志の間柄では「愈々暑休月となりました」なども時候挨拶の文句としてはよいだらう。

○文月○盛夏の候○大暑の候○甚暑の節○酷暑の砌。
 ○孟夏の候○三伏の候○炎暑の砌○昨今の暑さ殊に甚しく酷暑凌ぎかね候○炎暑堪へ難く候折柄○今年の暑氣殊に凌ぎかね候○昨今は殊に暑さが厳しくなりました。
 ○蟬時雨かしましき今日此頃○當年は殊に蒸し暑いやうです○例年のこと乍ら今年の暑さ格別に凌ぎかねますが○山百合の香りも高き頃となりました○數日來炎威殊に厳しくございますが。

八月の用語

○葉月はづき○連日れんじつの炎暑えんしょ○晩夏ばんかの砌みざり○残暑ざんしょの砌みざり○残暑ざんしょなほ甚はなはだしく候處ごころ○秋暑しゅうしょ凌しのぎ難がたく○土用どようあけの暑あつさ殊ことに嚴きびしく候あさいう
 ○暑熱じよねつ漸やうやく餘炎よえんを收をさめ候ちやうせきいくばんれいき○朝夕あさいう幾分いくぶん冷氣れいき相覺あいおほわ候あさいう
 漸やうやく涼すいしく相成あいなり候さくこんびやうもよほ○昨今さくこんび微涼わいりやう催きたし來り候しゅうしょ○秋暑しゅうしょ殊ことに凌しのぎかね候あさいう○朝夕あさいうはいくらか凌しのぎよくなりましが○土用どようあけの暑あつさかへつて嚴きびしう御座ございますが○一雨ひさめ毎ごとに涼すいしさおほを覺おほわるやうになりましが○立秋りつしゅうとは曆こよみの上うへのみにて、
 まだ凌しのぎかねる暑あつさで御座ございます。

九月の用語

○長月ながつき○新秋しんしゅうの候こう○秋冷しゅうれいの候こう○初秋しよしゅうの候こう○猛秋もうしゅうの候こう
 ○宵月よいづきの候こう○秋涼しゅうりやうの砌みざり○朝夕あさいう漸しゅうれいく秋冷しゅうれいを覺おほわ候處ごころ○秋冷しゅうれい
 相催あいもよほし候ごころ○何處どことなく秋あきのけはひ相見あいみわ候しよしゅう○初秋しよしゅうの風身かぜみ
 に泌しむ頃ころと相成あひなり申候し○一雨ひさめ毎ごとに秋色しゅうしよくわの加おほはるを覺おほわ申候し
 ○尾花おはなも穂ほに出いずる頃ころと相成あひなり候きぞ○樹々こすえの梢しやうも次第しだいに秋色しゅうしよく
 を呈ていし候たの○月つきを樂たのしむ良夜りやうやも近ちかづき申候りやうふ○涼風りやうふう吹衣ふいの候こう
 ○何なんとなく秋あきめいてまいりました○秋草あきぐさのいろく咲さき
 初ぞむ頃ころとなりましが○朝夕あさいうは肌寒はださむい頃ころとなりましが。

十月の用語

○神無月○仲秋の候○秋涼の候○秋冷の候○秋冷の砌○
 ○天高く馬肥へて腕鳴り肉躍る好季節○燈下親しむべき
 の候○秋容清爽の折柄○虫の音も漸くしげくなり申候○
 ○秋深く相成候○追々夜長の時期と相成候○いよ／＼菊
 の季節と相成候○何日しか秋の最中に相成候○萩も散り
 木犀香る頃と相成候○野に山に散策によい頃となりまし
 た○小春日和の朗な日が續きます○山は賑はふ茸狩り
 シーズンとなりましたが。

十一月の用語

○霜月○晩秋の候○暮秋の候○小春の節○深涼の候○
 ○向寒の砌○霜寒の折柄○落葉荒徑をうづむる頃○吹く
 風も身に泌む夜寒の頃○秋氣愈々深く相成候○秋も漸く
 たけ申候○寒氣相催す頃と相成申候○木の葉を誘ふ風も
 寒くなりまさり候○何となく冬近く感せられます○
 ○紅葉も今が見頃と存じます○朝夕は裕で凌ぎかねるや
 うになりました○秋も深くうすら寒く感せられます○
 ○御地はもうそろ／＼炬燵の頃と存じ上げます。

十二月の用語

○師走しはす○極月ごくげつ○初冬しよとうの候○寒冷かんれいの候○寒氣かんき増重ぞうらようの砌○
 ○月迫げつはくの候○日迫にっはくの砌○近寒みぎりごかんの候○嚴寒げんかんの砌○年末御多ねんまつごた
 忙はさの折柄をりから○寒氣相催かきあしもよほし候處○光陰くわういんは矢やの如ごとく月日つきひの流ながれれ
 よごみなく早はや年としの暮くれと相成申候○年内ねんないも餘日よじつ之無候○
 ○本年ほんねんも早はや數かずへ日ひと相成申候○寒氣漸かんきやうやく甚はなはだしく相成候
 ○いよ／＼冬景色ふゆげしきと相成候○もの淋さびしき冬ふゆと相成候○
 ○歳末さいまつのあはたゞしい今日けふこ此この頃ころ○いよ／＼本年ほんねんもおし
 つまりました○日に日に寒さむさが募つつてまいりました○

○いよ／＼おしつまつてお忙しいことゝ存ぞんじます○俄にわかに
 寒さむくなりました○迎年準備げいねんじゆんびに御多忙ごたぼうの事ことと存ぞんじます○

季節外の用語

季節外の挨拶はその天候
 候季候によつて夫れに
 適當した文句を用ひる
 もので、いつ頃はこう
 いふ文句を用ひるとき
 まつてゐないものをい
 ふのである○

○寒暖不整かんだんふせいの今日けふこ此この頃ころに候處○連日降雨れんじつかううの際さい○寒暖常かんだんつねな
 らず候折柄をりから○兎角不順こかくふじゆんに候折柄をりから○天候てんこう定さだまりかね候節○
 不順ふじゆんの時候じこですが○何なんとなく不順ふじゆんですが○久ひさしく雨が
 續つづくので困こまります○早天かんてん續つづきにて各地かくちに水騒動みづさうどうの噂うわさを聞き
 く折柄をりから○當地さつちは昨今漸さくこんやうく櫻さくらが咲さきかけました、御地おんちでは
 すでに青葉あをばの頃ころと存ぞんじます○

時候の挨拶に続いてお互の安否を尋ねることは交際上の禮で、その述べ方は、個人に宛てる場合と團體に宛てる場合との二通りがある。

個人宛の場合

先方の無事が分つてゐるときは、先方の無事を祝し、次に自分の方を述べる。先方の無事がよくわからないときは、先方の無事を假定して祝し自

安否の挨拶用語

個人宛先方の無事を祝す用語

- 貴下 益 御勇健の由大慶の至に存候。
- 貴兄 愈 御健勝の趣 欣賀の至に候。
- 貴官 倍 御清康の條欣賀の至に奉存候。
- 貴家 彌 御清福の段慶賀し奉り候。
- 皆々様御機嫌麗はしく御起居遊ばされ候趣何よりの御事と御喜び申上候。

分方を述べる場合、先方の安否を尋ね自分方を述べる場合、無沙汰を詫び安否を尋ね自分方を述べる場合等いろいろある。

團體宛の場合

會社、商店、銀行、學校、何々團、何々會等に宛てた手紙には、先方の安否のかわりに繁榮發展を祝することばを用ひる。此の手紙には自分の安否を書く必要は無いが、陳謝の挨拶

御喜び申上ます。

貴下	益	御健全	の段	芽出度存上候。
貴兄	倍	御健勝	の由	欣賀此事に御座候。
貴君	愈	御健在	の趣	大慶此事に候。
貴家	彌	御清康	の條	慶賀し奉り候。

抄などを書く場合がある。「私出征中は生家へ對し何かと御配慮下され難有感謝仕候」等書くのが夫れである。

個人宛無事を假定して祝す用語

- 貴下益御健勝にて軍勞御精勵の御事と恐察奉り候。
- 皆々模御機嫌よく渡らせられ候事と拜察仕候。
- 御父上様には御變りもあらせられず御壯健の御事と遙察仕候。
- 御家内皆々様定めて御機嫌麗はしく渡らせられ候事と遠察仕候。
- 貴兄相變らず御健在にて艦隊訓練に御精勵の事と御察し申します。

個人宛先方の安否を尋ねる用語

- 貴下御近況如何に候や御伺ひ申上候。
- 貴兄御近狀如何御尋ね申上候。
- 御一統様御障りもなく御暮し遊ばされ候や御伺申上候
- 姉上様には別段暑さ(寒さ)の御障りも御座いませんか御伺ひ申上ます。
- 時節柄御變りもありませんか。
- 其の後御變り御座いませんか。
- 御近狀如何ですか。

御尋ね申します。
御伺ひ申します。
伺ひ上げます。

団体宛先方の繁榮を祝す用語

- 貴社益々御隆昌の段奉慶賀候。
- 貴會倍御發展の段賀上候。
- 貴店益御繁昌の御事欣羨の至りに奉存候。
- 尊館彌御繁榮御祝申上ます。
- 貴團倍御發展の條慶賀の至りに存じます。
- 御盛祥の條 御芽出たら存じます。
- 御隆祥の段 賀し奉ります。
- 御成功の御事 御喜び申上ます。

自分の無事を述べる用語

- 降て小生無事軍務に精勵在罷候間御安心被下度候。
- 次に私事至極丈夫にて毎日恙なく勤務致居候間乍他事御休心被下度候。

次に	小生	無異	勤務致居候間	御安神被下度
降て	私も	恙なく	勉學致居候間	御安意被下度
隨て	私事	強健	訓練に従事致	御省慮被下度
	僕	健在	居候間	御心配下さる
		變りなく	暮し居候間	間敷候

陳謝、感謝の挨拶とは
禮を述べたり、無沙汰
を詫びるなどの挨拶で
其の仕方はいろ／＼あ
るが、便宜上無沙汰を
詫びる場合、いろ／＼
の御禮を述べる場合、
いろ／＼の御詫びを述
べる場合、等にかけて
記載してをいた。

陳謝、感謝の挨拶用語

無沙汰を詫びる用語

- 打絶わて御無沙汰致し申譯も無之候。
- 其の後は御無音に打過ぎ申譯御座無候。
- 一別以來疎遠に打過ぎ御宥免被下度候。
- 任務多忙の爲め心ならずも御無沙汰仕候。
- 打絶わて御無沙汰致し候段御赦し被下度候。

- 何分にも邊誼の地警備の爲通信意の如くならず、意外の御無沙汰に打過ぎ候段平に御許し下され度候。
- 公務多忙の爲意外の御無沙汰平に御宥し被下度候。
- 存じ居り乍ら音信を缺き皆様に申譯無之候。
- 近頃御便りもせず失禮いたしました。
- 母港出港後は何かと御無沙汰がら御許し下さる。

種々の御禮用語

- 昨日は御招きに預り種々御馳走に相成難有御禮申上候
- 平素は何かと御高配を蒙り御禮の申上様も御座無く候

- 御珍らしき御品御惠贈に預り深謝奉り候。
- 在艦中は公私共に御懇情を辱し難有御禮申上候。
- 在校中は懇篤なる御教導を蒙り深謝仕候。
- 左團中は親身も及ばざる御指導に預り衷心感謝仕候。
- 貴艦へ便乗中は何かと御心添へ下され厚く御禮申上候。
- 何々港在泊中は種々御款待を蒙り奉謝候。
- 休暇歸省中は種々御馳走に相成誠に有難く厚く御禮申上候。
- 出港の節は雨中態々御見送りに預り有難く御禮申上候。

種々の御詫用語

- 昨夜は長座仕り御妨の罪何卒御容赦被下度候。
- 昨日は拜趨の機を失し違約申譯御座なく候。
- 先日御來訪の節は誠に失禮致候。
- 一昨日は折角御入來の處小生不在にて失禮仕候。
- 過日は御邪魔致しました。
- 先日は態々御立寄下さいましたのに小生外出してゐまして誠に済みませんでした。
- 昨夜は長居しまして誠に失禮しました。

本文の起詞

書簡文は初めの挨拶即ち前文（頭語、時候の挨拶、安否の挨拶等）が済めば其の次に來るのが書簡文を書く目的たる本文の要件で、前文から本文要件に移る言葉のつなぎに入れる文句を起詞といふのである。そこで此處には此の起詞だけを記載して本文は最後に文例として海軍生活中に於けるあらゆる事項に就て述べることにする起詞は候文のみに用ひられるもの、口語文に限り用ひら

れるもの、候文、口語文兩者兼用のもの等がある。

いろくゝの起詞

候文に用ひられるもの〓〓〓扱て〓〓却説〓〓偕而〓〓偕〓〓陳者
 〓〓然者〓〓然れば、等
 口語文に用ひられるもの〓〓〓とところで
 候文口語文兼用のもの〓〓〓さて〓〓就ては、等

結文の挨拶用語

本文の要點を繰返して結ぶ挨拶用語

手紙の本文が済めば終りに何か挨拶の言葉を書く、之を結文といふのである。此の結文はハガキや、急用の手紙には往々省略されることもあるが、餘白があれば書いた方が禮儀にもなり又文章のまとまりにもなる。一概に結文といつてもいろ／＼の書き方がある、それは本文の内容が、千態萬様であるやうに結文の書き方も之

先は	御返事	まで	
右	御依頼	のみ	
此段	御見舞	申上度	如斯御座候
不取敢	御祝詞	申述度	
	御通知		

に順應せるものでなければならぬからであるけれ共、之を大別すると大体次の如きものに分つことができるのである「本文の要點を繰返して結ぶ場合」「後便又は面會を期して結ぶ場合」「返事を求めて結ぶ場合」「幸福を祈つて結ぶ場合」「健康を祈つて結ぶ場合」「傳言を頼んで結ぶ場合」「傳言を付け加へて結ぶ場合」「言譯し

- 右御報告申上候。
- 先は乍略儀書面を以て御禮申上候。
- 先は御無沙汰御詫旁々御伺申上候。
- 此段 申進め候。
- 此段 貴意を得申候。
- 先は乘艦御通知まで。
- 先は御喜びを兼ね御報告まで。
- 右くれ／＼も御依頼 申上候。
- 右忘れないうらに御頼みます。
- 先は右取あらず御知らせ申上ます。

て結ぶ場合」「其の他の場合」等である。

後便又は面會を期して結ぶ挨拶用語

- 書外拜眉の上。
- 餘は後便にて。
- 季細後便に譲り申候。
- 委細面會の節御話申上候。
- 何れ近日御伺ひの節萬々申述べべく候。
- 餘は他日推參の節委細申上可く候。
- 詳細は後便にて。
- 委細は御入港の節御相談可仕候。

- くはしいことは御目にかゝつてから申上ます。
- 詳細は何々君より御聞き下さる。

返事を求めて結ぶ挨拶用語

- 折返し貴答相煩度候。
- 何分の御回答相煩度候。
- 右折返し御回報下さるならば幸甚の至に御座候。
- 折返し御指圖御願申上候。
- 折返し御指圖被下候は幸甚に奉存候。
- 可否御返事被下度御待申居候。

- 公務御多忙中恐入りますが早急の御返事御願申上ます。
- 折返し御返事下さい。
- 何分の御沙汰を御待申ます。

幸福を祈つて結ぶ挨拶用語

- 一層御榮進あらん事を祈上候。
- 尚切に御奮闘御発展の程祈上候。
- 貴下の前途を祝福致候。
- 尚一層の御成功を祈上候。
- 一層の御繁榮を御祈り申上候。

- 乍末筆貴下の御多幸を祈ります。
- 倍御榮進あらん事を御祈り致します。

健康を祈つて結ぶ挨拶用語

- 酷暑の折柄一層御自愛の程祈上候。
- 嚴寒の砌御身御大切に被遊度祈上候。
- 折角御自愛專一に祈り上候。
- 朱筆乍ら貴兄の御健在を祈ります。
- 末筆乍ら乗員御一同の御健勝を御祈りいたします。
- 向寒の砌一層御自愛の程御祈申上ます。

傳言を頼んで結ぶ挨拶用語

- 乍末筆分隊員御一同へ宜敷御鳳聲被下度候。
- 末筆乍ら何々君へも宜しく御傳へ下され度候。
- 末筆乍ら何々兵曹へ宜敷。
- どうか奥様へも宜しく御傳へ下さい。
- 同年兵諸君によりしく申して下さい。
- 座歸港の節は下宿のおつかさんに宜敷傳へて呉れ給へ
- 御手数乍ら同封の書面を第何分隊の何々君に渡し給へ

傳言を付け加へて結ぶ挨拶用語

- 何々君よりも宜しくとの事に御座候。
- 分隊士よりも宜敷申聞け候。
- 愚妻よりもよしなに申上候やう加筆申出候。

言譯をして結ぶ挨拶用語

- 失禮の段御許被下度候。
- 亂文御判讀願上候。
- 多忙の際亂筆御許被下度候。

結語の書き方

- 右何卒御諒承の程奉願上候。
- 御返事延引の罪は平に御容赦被下度候。
- 右幾重にも御許しの程願上とす。
- 右謹んで御詫申上とす。

結語の書き方

普通の意味に用ひる結語

- 以上○擱筆○失敬○左様なら○失禮いたします。

結語は、止書 結辭、結尾などといつて本文の打止めを明かにし、最後の敬意を表す文句である。縦つて發信、返信兩方に同じものが用ひられる場合があり又返信のみに用ひる文

句もあるから注意されたい。

尙、注意すべきは、拜啓、謹啓、等々……の「頭語」を置き乍ら、「結語」を略すること、は不調和であるし、頭語と結語とは均衡を保つものを書くことが肝要である。夫れが爲には、此の結語はどういふ意味に用ひられるのか、といふことを下記の説明に依つて會得して居らねばならぬ。

鄭重の意味に用ひる結語

- 頓首○謹言○敬具○拜具○再拜○啓上○九拜○百拜
- 敬白○肅白○拜伏○恐惶謹言。

陳謝の意味に用ひる結語

- 早々○草々○匆匆○不盡○不宣○不具○不一○不備
- 不既○不悉。

返信のみに用ひる結語

結語の書き方

○拜復はいふく○敬復けいふく○謹復きんふく○拜答はいたう○謹答きんたう○貴酬きしう○謹酬きんしう○尊酬そんしう

書簡の添書

此處には、添書の起詞に用ひられる文句だけを記載して、添書の文句は省略した。

それは、軍人の書簡にはこの添へ書の文句を一々記載するほど必要を認めないと思つたからである。

添書の起詞

添書そえがきは本文ほんぶんを書き、日附ひづけ、署名しよめい、宛名あてなも書いてしまつてから、更に本文外ほんぶんぐわいの餘白よはくへ書き添そへるものである。本來ほんらいは本文ほんぶんに書き盡つくすべきものであるが、手紙てがみの種類しゆるいで本文ほんぶんの用件やうけんが混み入いつてゐるとか、念ねんを押おす必要ひつやう上殊じゆ更に書き

添そへて一層明さうあきらかにするとか、書き漏もらしたことを附つけ加くわへる場合はあひに書くものである。

添書そえがきをする場合はその書き出だしに次つぎのやうな起詞おこしごを用もちひるのが普通ふつうである。

○副啓ふくけい○二伸しん○再伸さいしん○追申つひしん○追敬つひけい○再び申上候ふたまたまをしあげ○重ねて申上候まをしあげ○尙ほ○追て。……等

團内通信

團内通信とは海兵團に勤務中に書く手紙の總稱のつもりである。團内に勤務してゐるときの通信といつてもいろいろの場合があらうが、順序として此處には、先づ四等兵として入團當時即ち『入團通知』の如きものより書き始め、新兵教育を終つて艦船へ乗組むまでのいろいろの書簡文例を示し、次は海兵團定員として勤務して居るときの書簡文例を示し、最後に補充員として一時海兵團に

在るもの、書簡文例を示すこととする。

尙、満期の爲に海兵團に在團するもの、書簡文例は、

『満期前の通信』として稿を改めて書く事とした。

入團通知及禮狀

【無事入團を報ず】(一般)例一

入團したときに出す無事入團の通知狀とか挨拶狀、禮狀等は、相手方と別れてからまだ間のないときに出すものであるから時候の挨拶などは要らない。

拜啓貴家御一同様益々御清榮の段奉賀候、
 扱て、私儀今回入團に際しては多大の御餞別を賜り且つ遠路態々御見送り被下感謝に不堪候。就ては途中無事本日左記分隊へ入團仕候間、乍他事御放念被下度、此上は

帝國海軍々人として身命を君國の爲に捧げ御奉公致す覺悟に御座候故將來共倍舊の御教示御鞭撻の程願上候
 先は御禮 旁 御挨拶迄 如 斯御座候
 頓首

昭和十年六月一日

佐世保海兵團練習第三分隊五教班

濱田町之助

教班は、たいいてい入團の前後に分明するものであるが、自分の編入される分隊教班が判つたからとて直ぐに「無事入團しました」などの挨拶状を投函してはいけない。書くのは何時書いてもよいが、投函するのは身體検査が終了して愈々入團してからにすべきものである。

身體検査が終らないう

【無事入團を報ず】(一般)例二

謹啓時下嚴寒(向暑)の砌 御高堂愈々御清適の段慶賀奉り候。

陳者 小生儀今回入團に際しては遠路態々御見送り被下

ちに「無事入團致ましたから御安心下さい」などと手紙を出して、

其の後に身體検査不合格の爲「疾病の爲歸郷を命ず」といふやうな書付を貰つて歸らなければならぬやうになつたときには面目をふみ潰してしまふ。自分では必ず身體検査に合格すべき自信のある場合でも、投函は入團確定後にしたが間違ひがない。

誠に難有御厚禮申上候 就而本日無事左記へ入團致候間乍他事御休心被下度 乍失禮取急ぎ以寸 楮御禮 旁 御通知申上候

一月十日 吳海兵團第十五分隊三教班

泉 場 町 雄

【無事入團を報ず】(両親へ)

拜啓陳者豫定の通り本日無事入團致し表記の分隊へ編入せられ候間御休心下され度候尙此の上は豫々の御教訓を守り帝國海軍々人たる本分を立派に盡す覺悟に御座候へば私の身に付ては決して御配慮下さる間敷候

先は取あわず書中を以て御通知申上候

匆々不一

六月一日

大瀧町 太郎

【無事入團を報ず】(親しき友へ)

大島君

在村中はいろく御懇情を蒙り有難う、猶出發に際しては雨中態々御見送り下され衷心より感謝してゐる。僕は萬歳の聲と共に汽車が動き出したときには實に感慨無量思はず目頭が熱くなつて君等の顔が霞んで見えた。間もなく故郷の驛は見えなくなる。大粒の雫が両頬をつ

下記は親友へ送るべき手紙文の一例である。少し長過ぎた嫌もあるが、口語文で書いた。候文で書けば餘程短文になるけれ共、文章がかたくなり易いから特に對談口調で書く口語文を用いたのである。

たふ。けれ共君之は不覺の涙では無い。何れも感謝感激の結昌水である。僕は君等の萬歳の聲が未だ耳底に残り君等が帽子を振り乍ら見送て呉れた光景がまざくくと目前に浮んでくる。僕は検査に合格して海軍兵に決定したとき既に自分の責務の重且大であることを自覺してゐたから君等が僕に對する最後の饌である萬歳の聲を聞いて更に一大勇猛心を奮ひ起し一路吳軍港へと向つた。

そして昨日午後七時頃吳驛に着いた。驛前には天幕を張つて海軍から入團者案内係が来て居られ親切に案内をして貰つた爲不案内の土地でも何等まごつくことなく指定

旅館に落着くことが出来た。指定旅館は泉場町の級進館といつて僕等には縁起のいゝ名前の旅館であつた。餘り廣くは無いが小ざつぱりした頗る感じのよい家であつた。来て見れば先着の同郷入團兵が五人程来てゐた。夜九時頃海兵團から紅い腕章を付けた下士官が來られていろいろと入團の注意事項を御話下さつた。九時半床へもぐり込んだが入團のことや故郷の事などが次から次に考へられなか／＼寢就かれなかつた、そのうちうと／＼と眠つたかと思はば既に五時半早速飛起きて皆の者と朝食もそこ／＼に濟ませ出發準備をして待つて居ると海兵團から

入團時の身體検査は入團前に受けるものもある。

摺筆＝書くことを止める

迎への水兵さんが來て僕等を連れて海兵團練兵場へ到着する。僕等は自分の聯隊區の札の立つて居るところへ行って整列してゐるとやがて午前八時半頃よりわれ／＼は夫れ／＼呼出されて分隊に編入される僕は左記分隊に編入されて教班長に引卒され兵舎へ入り直ぐに身體検査を受けたが何處も大丈夫で無事に入團したから安心して呉れ給へ。之からは一向に軍務に精勵して天晴なる帝國海軍々人となり君國の爲に御奉公するつもりだ。まだ書き度い事は澤山あるが今日は入團匆々にて何かと多忙で之以上書く暇が無いから餘は後便に譲り摺筆する。

乍末筆君の御健在を祈る。

六月一日 吳海兵團第十五分隊十教班

小 島 松 吉

【無事入團を報ず】(親戚へ)

拜啓陳者過日は遠路態々御見送り下され其の上に過分の御餞別まで載き有難く御禮申上候。

扱て小生儀一月十日午前八時無事佐世保海兵團に入團致し左記分隊に編入され身体検査も終了し水兵服に身を固め申候間他事乍ら御安心下され度候 之からは専心軍務に精勵し天晴れ國家の干城となり君國の爲に御奉公をな

す覺悟に御座候。

先は寸楮を以て御禮 旁 御通知申上候。

頓首

一月十日 佐世保海兵團練習第三分隊一教班

濱 田 町 之 助

伯父上様

二伸、留守中は何かと御配慮煩し度願上候。

【無事入團を報ず】(市町村長へ)

謹啓益々御健勝奉賀候。陳者小生出發の際は態々御見送り被下難有御禮申上候。以御蔭本日無事横須賀海兵團へ

團内通信

一四三

添書は下記のやうな要領に書くべきものである。

入團致し表記の分隊へ編入被致候間御安心被下度候。國家の爲今後出來得る限りの御奉公を致し村（町、市）の名譽を揚ぐる様粉骨碎身の努力を致す覺悟に御座候。乍末筆吏員御一同様へも宜敷御鶴聲被下度候。先は御禮旁々御挨拶迄如斯御座候

敬具

【無事入團を報ず】（小學校長へ）

肅啓陳者小生入團に就ては御多用中にも拘らず何異とな
く御配慮を賜り、又出發の際は生徒一同を引卒されての
御見送りを受け身に餘る光榮に存候。

御蔭を以て途中恙がなく吳軍港に到着し本日身体検査も
異状なく無事入團して帝國海軍々人の一員と相成申候故
何卒御安心被下度候。

今後は校長先生をはじめ諸先生方の御教訓に遵ひ忠勇な
る海軍々人となり君國の爲に御奉公致す覺悟に御座候。
乍末筆諸先生はじめ生徒諸君へ校長先生より宜敷御披露
の程御願申上候。

右不取敢御禮旁無事入團の挨拶まで。 敬白

一月十三日 吳海兵團第二十五分隊四教班

泉 場 町 之 助

父はいつも、男の子を一人海軍に志願させた。いと豫てより云つてゐた。所が其の父は自分等が幼い頃に亡くなり、後は母の手一つで兄弟が育てられた。お母さんは自分一人が苦勞して手塩にかけ、やうやく大きくした兄弟ではあるが弟の方はお父さんのかねがねの望み通り海軍に志願させて立派な軍人にしてやりたいと願つてゐた。その

【無事入團を報ず】(兄へ)

兄上様御喜び下さい。私は本日無事に入團致しました。午前八時海兵團の門を潜りました萬事故障なく身体検査も終り十時頃には私服を水兵服に着換まして、天晴海軍軍人らしくなりました。来る四日が晴の入團式ださうです。出發に際しての御教訓は決して忘れず立派な軍人となり亡き父の遺志を繼ぐ考へです。まだ軍隊の様子は判りませんが如何なることがありましたも決して屈せず、勇往邁進し一步も人後におちない覺悟ですから此の儀は御安心下さい。まだ書き度いことはありますが入團

息子から兄のもとに來た手紙が下記の如きものであれば母や兄はどんなにか嬉しいことであらう。早速父の墓前にお詣りして報告したことであらう。

勿々で取込んでゐますから後日に譲ります。留守中は、母上様のことを宜敷御依頼申上ます。では之で失禮致します。

一月十日

島之助より

兄上様

【艦船乗組の同郷出身先輩に入團を知らせる】

拜啓陳ば向暑の砌貴下益御健勝にて軍務に御精勵の事と拜察仕候。諸て小生豫而より貴下が海軍勤務致し居らるるを常に羨しく存じ海軍々人に憧れ居候而して自分も

隣家の健ちやんは二三年前に海軍に志願して今では一等水兵とやらになつてゐる。休暇に歸るときはいつも片手に大きなトランクを下げて近くの町の停車場で降りる。自分は健ちやんのおばさんに頼まれて健ちやんが歸る時刻にはいつも自轉車で驛まで迎へに行く、歸りにはトランクを自轉車に積んで自分は自轉車を押し乍ら、健ちや

んの海軍生活の面白い話を聞き乍ら歸るのであつた。歸ると健ちやんはトランクから海軍の繪葉書や軍艦寫眞帳のやうなものを出して土産にくれる。こんなわけで自分は断然海軍が好きになつた。そして大きくなつて希望通り海軍へ入團したとき始めて健ちやんへ出した手紙がこれである。と思つて貰ひたい(艦船乗組の同郷出身)

何とかして海軍々人になりたいと念願し貴下が歸郷の度にいろいろ御話を伺ひ居り候が今年愈々志願年齢に達したる爲海軍に志願し検査を受け候處幸にして甲種合格と相成り機關兵に採用せられ候就ては此處に日頃の念願叶ひ去る六月一日無事入團致し左記分隊へ編入致され候故乍他事御休心被下度、之も偏に貴下が海軍の事情を詳しく御話下され且つ何かと御指導下されたる賜と深く感謝致居候小生も之から大いに勉強し出精して同郷出身先輩各位の御指導御鞭撻のもとに一人前の海軍々人と相成るべく努力する覺悟に御座候間何卒宜敷御願申上候

先は入團御通知 旁 御挨拶まで。

六月十日 横須賀海兵團第十五分隊六教班

汐 入 海 男

四等兵(新兵)の書簡

【入團當日の様子を知らす文】(両親へ)

拜啓嚴寒の候父上様を始め皆々様御變り無く御暮し遊ばされ候や、御伺 申上候。

扱て私事入團してみると初めての處とて、見るもの聞くこと皆珍らしく、且つ何かと勝手が不案内にて要らざる

先輩に入團を知らせる文)

時候の挨拶は、一月入團兵は「嚴寒の砌」でよいが、六月入團兵は「向暑之候」とか「青葉の候」とか書かねばならぬ。

新兵當時實際面倒を見て呉れるのは我らの教班長である。便りになるのは教班長である。

「衣囊」も「手箱」も「帽子函」も凡て入團後に覺へた名稱である筈。

スマシ込んでゐる＝平氣でゐる。

團内通信

一五〇

ところに氣を遣ひ心の休む暇も無之候へ共、夫れが爲日時の立つのも速く、既に入團してより一週間を夢の如く過し申候。而し此の頃では總ての様子も解り心に餘猶も生じ落付いて手紙書く暇も見付かり申候故入團當時の模様をざつと御知らせ申上候。

私等は教班長(教班長といふのは下士官であつて、之から新兵教育を卒へて艦船へ乗組む迄私等と寢食を共にし教育萬端申すに及ばず日常總ての面倒を見て下さる地方で申せば先生師匠兼父母の役をして下さる人)に引卒されて所屬分隊の兵舎に入り申候。分隊に至れば衣囊(

衣服の入れてある囊)手箱(日用品の入れてある箱)帽子函(軍帽の入れてある函)及銚器に至るまで總て自分の持物には自分の名前が書いて有之候。そこで私共は各自自分の名の書いてある衣囊より軍服を出して着換申候此の軍服も一人で次々に順序よく着る者は無之、すべて教班長に一々手に取る如く教へて貰つて着終つたものに候それでも中には襦袢(シャツ)を前後返對に着てスマシ込んで居るものや、袴下(ツボン下)を前後間違へてはいて放尿が出来ないなどのナンセンスも有之候。しかし道に帽子を前後に被つたり靴を右左間違へて履い

教班員数は其の時の編成や缺員の有無に依つてちがふが普通十名乃至十六名位である。一個分隊の教班数も十教班乃至十四教班位である。但し看護科とか主計科のやうに兵員数の少ない科では其の時の入團兵数に依て異なる。

たりするものは無之候。軍服に着換へてしまふと自分乍ら軍人らしくなつたやうな心地がいたし、思はず鏡の前に立ちてニンマリ致候。そしてこんな姿を御両親に見せたら嘸よろこんで下さるだらうなどと家庭のことを思ひ出だし候。教班員(十四人)が全部軍服に着換へ終ると教班長に引卒されて團内を見學致候。洗面所、便所、賄所、酒保、海兵團本部、砲臺、兵舎等々の概略を見學し午前十一時半には教班から二名づゝ出て(一個分隊には十二教班あり)分隊助手(二等兵)に引卒され食餌を受取に賄所へ行く、食餌は四角なニュームの器(鍋と

海軍での「分隊」は陸軍に於ける中隊のやうなものであると思へばよい。

陸軍では普通の兵員が炊事當番として中隊から交互に出て炊事に當るのであるが海軍では主計兵といつて専門の兵員がゐる。

いふ)に入れてあり、大の器(鍋)には飯、小の器(鍋)には副食物が入れてあり、大の器の蓋が裏返して之に漬物が入れてあり候。分隊へ歸れば教班長が教班員を集められ自ら食器を手に持つて飯の盛方から副食物の盛方に至るまで親切に御教示下され候。飯は中の食器に一杯副食物は大食器に盛り何れも一杯限りにて十四人前を過不足無きやうに盛り切るのは始めの中は一寸難かしく候而しなれて來るとなか／＼手際よく盛切るやうに相成候午後は整列の仕方や、敬禮の仕方、人の呼稱法等を教り申候。此處に私共が初め變に感せられ候事は、海軍では

海軍では呼稱するとき
は「殿」を用ひないが
文書に書くときには、
「殿」を用ひる。即ち
「分隊長殿」「艦長殿」
等書くのである。

釣床は「ハンモック」
と云はないで「つりど
こ」といふのが海軍で
の正しい云ひ方である
が地方人にはハンモッ
クの方が一般によく知
られてゐるから特にハ
ンモックとしてをいた

陸軍のやうに「殿」と付けて呼ばない事に御座候。海兵
團長でも、分隊長でも、教班長でもすべて呼びすてにす
ることにて始めの程は何んだか失禮にあたるやうに考へ
られ、思はず教班長殿と呼んで「殿」は要らないと注意
される事も度々有之候。夜になれば釣床の釣方から結り
方、釣床に這入つて寝る方法等細々と教班長が叮嚀に模
範を示して教へ下され候。私共は教へられたる通りに
釣床を釣つて生れて始めて釣床といふものにはいり海軍
生活の第一夜を圓かな夢を結び申候。
では餘り長く相成申候故これにて失禮仕候。

五日午後十時初夜巡檢後、故郷の空に想ひを馳せつゝ、
ハンモックの下にて之を書く

島 雄 よ り

御両親様 膝下

【入團式の模様を知らず】(友へ)

横須君

第一種軍装は黒服、
第二種軍装は白服

日附に時刻や場所を記
入することは既に本書
の「略式の日附」の項
で述べてをいたが、實
際に書いて見ると下記
の通りである。之に依
つて略式日附特有の感
じを味つて見て貰ひた
い。

僕等の榮ある入團式は今日團内練兵場に於て嚴かに施行
された。其の模様を御知らせしやう。
今回の入團兵二千餘名は第一種軍装(夏季は二種軍装)
に着換へて午前八時號令臺に面して分隊毎に整列し團内

入團式は團入後三、四日位に施行されるのが普通である。それは、入團式に着る服装を整へたり、整列の仕方を教はつたり。最敬禮の仕方等を教はつて氣を付け、休め等の姿勢が出来るやうになつてから入團式を施行せなければ御寫眞の奉拜も出来ないからである。欣喜雀躍し嬉しくて小躍りしてよろこぶ。

陛下の御眞影を咫尺の間に拜して我等は此處に忠勇なる帝國海軍々人となつたのである。

團内通信

一五六

の先輩士官下士官兵も亦定位に就て整列する。間もなく長官禮式の樂の音につれて司令長官臨場、續いて衛兵隊の捧げ銃の號令と共に軍樂隊の「君が代」の奏樂裡に肅々と兩陛下の御眞影は掲げられ、僕等は定められたる人員毎に前進して最敬禮を以て御寫眞を奉拜しました。之が終ると團長の軍人勅諭の奉讀があり、團長及司令長官の懇篤なる御訓示を受ける。之を以て式は終了したのである。僕等は今完全に名實共に帝國海軍々人となつたのである。愈々之から一意専心己が本分を盡したゞく君國の爲に御奉公することとなり誠に欣喜雀躍の至りで

ある。君、入團式は僕等の一生忘るゝことの出來得ない意義ある儀式であつた。特に御寫眞を奉拜するときの心持は有難くて何んともいえない感に打れた、眞に此の一殺那に「我は軍人となりました陛下の股肱の臣でございませす、必ず君國の爲に一身を捧げて御奉公致します」との堅い堅い決心の程を心の裡に御誓ひ申した。入團式の模様と自分の覺悟を述べて、餘は後便に譲り一先づ筆を擱く。さよなら

一月十四日

東洋 吳男 より

入團の際に、着て行つた衣類や、履いてゐたものなどは入團して軍服に着換たら、それぞれ小包にして送り返してしまふ。此の小包は入團後一週間以内に團内から纏めて發送してしまふものである。此の發送を通知する各自の手紙が下記のものである。別紙記載の通りとは別の紙に送る物品の名前と數を書いて封入して置くものである

【衣類の返送を通知す】

拜啓陳者其の後皆様御變りなく御暮し遊ばされ候こと、遙察仕候。さて小生も入團致し候てより今日で四日目と相成候。此の頃では團内の様子も略わかり萬事落付き軍務に精勵致し居り候故、御安心下され度候。就ては入團の爲不用となりたる物品別紙記載の通り本日小包郵便を以て御返送申上候間、御受取下され度候。先は御通知まで。

乍末筆皆様の御健在を御祈り申上候。

不

【日課の模様を家族へ知らす】

海軍に於ける日課は、冬季日課、夏季日課、嚴寒日課、酷暑日課等があつて夫れ々其の時候に適した日課を施行されるものであるが下記の文例は六月入團の志願兵の手紙として夏季日課施行の時分に書いた……と思つて貰ひたい。

拜啓暑さ厳しき折柄、御両親様を始め義夫さんも花子さんも皆御壯健で御暮しなされ候や御尋ね申上候。降て私も入團以來至極頑健にて毎日軍務に精勵致居候間。御安心下され度候。偕て月日の經つのは早いもので、私が入團致し候てよりはや二十日餘りと相成り、此の頃では團内に於ける日課の具合もよく判り萬事愉快に勤務致居候就ては最近に於ける團内勤務の様子を申上げ御心配を消す料にも致し度と存じ候。

朝は五時起床、夜は八時三十分就床に御座候。午前六時

たい。

十五分朝食、十一時四十五分晝食、午後五時十五分夕食に御座候。朝食迄には別科として體操とか手旗信號の練習等を致し候。朝食後は日課手入といつて居住甲板兵舎内外の掃除や銃器の手入、大砲の手入等を致し、午前八時四十五分から十一時半まで、午後一時十五分から四時までは本科として午前は陸戰教練、午後は短艇撓漕（ポート）を漕ぐ練習）を致し候。午後四時十五分から夕食までは夕別科として銃劍術、劍道、柔道等の武技や体技などを致し候。夕食後は入浴とか學科の溫習を致し候。猶海軍にては、毎月曜日の午前には分隊点檢といふ日課が

被服縫繕とか家庭通信とかの時間は海軍一般にある日課ではないから其のつもりである。貰ひたい。必ずこういふ時間が與へられるものと勘違ひをしないやうに。

有之候。此の分隊点檢といふのは分隊の軍容及各個の服装容儀を点檢せらるゝもので私等は服も帽子も靴も靴下も襦袢も何もかも一番よいもの着たり履いたりして最も緊張して整列致し候。点檢者は分隊長の場合と團長の場合と有之候へ共、多くは分隊長の点檢に御座候。毎土曜日には必ず大掃除を行ひ火災教練を實施せられ候。此の火災教練は火災を想定して各受持部署に付き實施するものに候。而海軍獨特のものゝやうに存じ候。土曜日午後には『被服縫繕』といふ時間を與へらるゝ事有之候。之は各自の與へられてゐる被服の整理整頓をなす時間に

て、教班長より承れば之は我々新兵のみに與へられ
 たる時間であるとの事に御座候。私等は此の時間に、軍
 服に氏名を書き込んだり、服の大きなものは縫ひ縮めた
 り、ボタンを着けたり致し候。御蔭で海軍へ來てから鉄
 の使ひ方や縫針の使用法なども上手に相成候。日曜日に
 は相撲やいろ／＼の体技を致して休業いたし、夕別科に
 は必ず團内練兵場等にて軍歌を合唱致し候。被服の洗濯
 は分隊員一齊に爲し主に別科時間或は日曜日の午前等に
 行ひ一週間に一度は必ず有之候。洗濯法も海軍獨特の方
 法有之、始めのうちはなか／＼難かしく御座候へ共此の

特別に家庭通信などの
 時間が與へられなくとも
 も家庭へは度々手紙を
 出すやうにせねばなら
 ぬ。休憩時間等に書く
 ことが出来なければ日
 曜 祝祭日の休業日と
 か或は巡檢後起きて職
 友の就寢を妨げないや
 うにハンモックの下で
 書くがよい。消燈時間
 まで書けば相當長い手
 紙も書ける。

頃では練習が積んで短時間に澤山の洗濯物を清潔に洗ふ
 やうに相成候。猶私共新兵には別科時間等に「家庭通信」
 といふ時間を與へらるゝこと有之候。此の時間には必ず
 手紙を書く事に相成居候。皆の者は夫れ／＼思ひ／＼に
 手紙を書いて家庭の方や親戚や友達などに通信致候。此
 の手紙も非常に長く相成候ひしも軍隊に於て與へられた
 る家庭通信の時間に書いたものに座候。只今家庭通信の
 時間も「後五分間」といふ號令がかゝり申候故、今日は
 之にて失禮仕候。 早早不一

【衣食の状況を母に知らす】

お母さん

子供を兵隊に出してから家で一番心配して呉れるのは何んといつても母親である。それが若し母一人子一人の間柄であつたなら母は人一倍軍隊に在る我子の事が氣に懸るであらう寒いに付け、暑いに付け母は我愛し兒の身の上を案じて居る。とりわけ寒からう、暑からう、ひもじからう。之が母の心配の種になることが多い。こんな氣

此の頃は非常に寒さが厳しう御座いますが御壯健で御暮しなさいますか。寒い時分には御無理をしないやうにして私が立派な軍人になつて歸るのを樂みにして待つて下さい。私は入團以來至極丈夫で皆の者と一諸に上官の命をよく守り一生懸命に御奉公を致して居ります。寒い時候ですが、私等は地の厚い羅紗の軍服を着て下にはフランクネルの襦袢（シャツ）や腹巻などをいたし袴下（ズボン下）をはいて、猶其他に防寒用のチャケツや腹

苦勞をして人知れず心配をして居る母へ下配のやうな手紙が届いたら、母はどのやうに喜ぶであらう。我子は軍隊で何不自由なく丈夫で勤めて居る。と知つた母は安心して其の手紙を抱いて嬉し泣きに泣き乍ら寝ることであらう。

此の手紙は母に出すといふので、特にやさしく口語文を以て書いた

巻等を給與されてをり、夫れに兵舎内には煖爐の設備もありますから寒さ知らずに勤務してゐます。亦食餌は何れも衛生的に美味に調理してありまして、御飯は三食共少量の割麥が混ぜて炊いてありますが一回に澤山炊く御飯ですから味はともよいものです。副食物は朝は味噌汁、晝は肉類、夕食は魚類と殆どさまつて居りまして三食共漬物が添へてありますから、相當に多量のものですが一物も残すやうなことなく全部喰べてしまひます。又一週間に二回位御飯の代りに食パンを給與されます。食パンといつても堅いパンと違つて、出來だての極柔か

新兵教育を終へて艦船へ乗艦を命ぜらるゝ場合には、軍艦に乗るもの驅逐艦や潜水艦等に乗組ものがあるかも知れないが、此處には地方人にわかり易いやうにたゞ「軍艦に乗組む」と書いてをいた。

いものですからよい味がいたします。右のやうな次第で衣食に何等不自由なことも無く、勤務も毎日愉快にやつてゐますから、私の身に就ては、些も御心配下さらないやうに、御躰を大切にして暮して下さい。私も新兵の間は休暇もありませんが、軍艦に乗組むと夏冬休暇が許されますから、其の際には御膝元へ歸つて詳しい海軍の御話をいたします。では之で失禮します。

【短艇撈漕の模様を友へ報ず】

拜啓陳者數日來炎暑殊に嚴しき折柄、貴君益々御勇健に

一月入團兵は凍傷（シモヤケ）に腦まされ、六月入團兵はタムシに腦まされる。

て農事に勉勵致し居られ候や御伺ひ申上候。降て小生も入團以來至極頑健にて軍務に精勵致居候故御安心下され度候。但し同年兵にはタムシ（皮膚病）に惱まされ居る者も多數有之候へ共、小生は何等の異状も無之候。偕而小生等は此の頃毎日のやうに短艇撈漕（ボートの漕ぎ方）の練習を致し居り候。我々の練習する海軍の短艇は十二挺立カッターと申し片舷に六挺宛の撈（オール）を備へて漕ぐものに候。即ち両舷に十二挺十二人にて一齊に漕ぐ練習を致候。短艇を漕いで居るのを見ると何んの苦も無さやうに御座候へ共、實際自分が漕いでみると